

講武地区遺跡分布調査報告書 2

1988年3月

島根県 鹿島町教育委員会

講武地区遺跡分布調査報告書 2

序

鹿島町講武地区は、数多くの埋蔵文化財があるところとして知られていますが、この地区で圃場整備事業が計画され、すでに一部は着工をみております。こうしたなかで、遺跡の範囲を確認し、後世に正確な記録を残すため、昨年度から国庫補助事業として講武地区遺跡分布調査を実施してきているところであります。

今年度は、講武地区の中心部の講武川流域条里制遺跡の確認に重点をおいて実施しました。残念ながら、条里制遺跡については確認できませんでしたが、北講武地区において、講武地区で最初に農業を始めた人々の遺跡が見つかったように聞いております。また、現在の水田下には、厚く砂や砂利の堆積があって、この地で農業にいそしんだ人々の大変な苦労もしのばれたようです。こうした先人の労苦を知ることによって、私達の明日への展望を開きたいものと思います。

終わりになりましたが、調査にあたってご協力いただきました土地所有者の方々、ご指導をいただいた島根県教育委員会をはじめとする方々にあつくお礼申し上げて、報告書発行のごあいさつとさせていただきます。

昭和63年3月

鹿島町教育委員会

教育長 袖木重幸

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が前年度にひきつづき昭和62年度に図書補助事業として実施した講武地区遺跡分布調査の報告書である。
2. 調査は、講武川流域条里制遺跡の確認のための発掘調査に主眼をおき、あわせて周辺の遺跡について図化作業を行った。
3. 調査地所在地と、ご協力いただいた土地所有者のご芳名は以下のとおりである。土地所有者の方々には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。(敬称略)

調査区	所 在 地	上地所有者	調査区	所 在 地	土地所有者
1	鹿島町大字北講武939-1	古瀬 勝 美	14	鹿島町大字南講武736-1	宮 遷 二 郎
2	同	958-1	古瀬 肇	15	同 713
3	同	853-1	古瀬 雄 雄	16	同 705-1
4	同	901-1	古瀬 岩 雄	17	同 230
4-1	同	853-1	古瀬 雄 雄	18	同 244
4-2	同	855-1	宮 遷 吉 道	19	同 224-4
4-3	同	858-1	宮 遷 彰 男	20	同 245
4-4	同	898-1	古瀬 岩 雄	21	同 42
5	同	859-1	宮 遷 英	22	同 4-1
6	同	894-1	古瀬 篤	23	同 32
7	同	863-1	宮 遷 英	24	同 13
8	同	868-1	古瀬 篤	25	同 23-1
9	同	869	古瀬 道 矢	26	同 19-1
10	同	875-1	古瀬 方 郎	27	同 30-1
11	大字南講武723-2	宮 遷 貞 雄	28	同 113-1	長 嶋 二 郎
12	同	730-1	石 橋 直 久	29	同 57-2
13	同	718-1	宮 遷 貞	30	同 93-1

4. 条里制遺跡にかかる調査は、昭和62年11月4日から12月17日まで実施した。
5. 調査体制は以下のとおりである。

事務局 井ノ口隆義(鹿島町教育委員会教育次長)
 曽田 稔(　　同　　社会教育主事)

調査指導 右井 悠(松江市立第二中学校教諭)
 ト部 吉博(島根県教育庁文化課文化財保護主事)

調査員 赤沢 秀則(鹿島町教育委員会主事補)
 作業員 宮 遷 武男、石橋 駿、石橋 久子、曾田芳子、中村美代子、古瀬玉子、古瀬智恵子
6. 報告書の作成にあたって、第29調査区検出の流木の樹種については、奈良国立文化財研究所光谷拓美先生からご教示をいただき、繩文時代晚期から弥生時代前期の遺跡、遺物の検索にあたっては、島根大学法文学部田中義昭先生の、向山古墳出土子持壺の実測および類似資料の検討においては、同学部渡辺貞幸先生、山本清先生のご協力をいただいた。また、出土石器の石材については、島根県教育庁学校教育課三島欣一先生のご教示をいただいた。以上、記して謝意を表します。
7. 周辺の遺跡の測量調査には、佐藤雄史、宮本正保、松山智弘(以上、島根大学学生)、中村鶴夫(町立歴史民俗資料館)が、図面の作成には朝山千穂(町立歴史民俗資料館)が参加した。

目 次

序	
I 調査の経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	4
第1調査区	6
第2調査区	6
第3調査区	7
第4調査区	7
第4-1調査区	10
第4-2調査区	10
第4-3調査区	11
第4-4調査区	11
第5調査区	12
第6調査区	12
第7調査区	13
第8調査区	13
第9調査区	14
第10調査区	14
第11調査区	15
第12調査区	15
第13調査区	16
第14調査区	16
第15調査区	17
第16調査区	17
第17調査区	18
第18調査区	18
第19調査区	19
第20調査区	19
第21調査区	20
第22調査区	20
第23調査区	20
第24調査区	21
第25調査区	22
第26調査区	22
第27調査区	22
第28調査区	23
第29調査区	24
第30調査区	24
IV 周辺の遺跡	26
講武岩屋古墳	27
向山古墳	30
堆ヶ崎荒神古墳	34
V 小 結	36

I. 調査の経過

鹿島町講武地区は、島根半島有数の水稻耕作地であり、鹿島町全体の水田面積270haのうち、講武地内は183haを占めている。このうち約半分については昭和30年代に区画整理事業が行われたが、依然として排水は不良のうえ、道水路網は不備であり、同地においての圃場整備事業の実施は関係者の強い要望であった。こうした要望をうけて昭和59年度から講武地区県営圃場整備事業が133haを対象として開始されている。

一方、この事業計画地域内には、点々と遺跡が存在しているため、関係者の度重なる協議を経て、昭和59年度から以下のように発掘調査を実施してきている。

名分塚田遺跡第1次調査（昭和60年1月）

名分湯戸遺跡群発掘調査（昭和61年2～3月）

名分塚田遺跡第2次調査（昭和61年6～7月）

講武地区遺跡分布調査（南講武草出遺跡、南講武大川遺跡、昭和61年10～12月）

講武地区遺跡分布調査は、圃場補助事業として、近い将来圃場整備事業の実施されるこの地区について、事業実施前に遺跡の分布を確認しようとするものである。62年度は、講武地区のうち、講武川流域条里制遺跡について、遺構の存否、範囲を確認するために実施した。また、合わせて、周辺に所在する遺跡についても、園化作業を行った。

講武川流域条里制遺跡にかかる調査は、昭和62年11月4日から12月17日まで実施し、周辺の遺跡については12月24日から昭和63年3月4日まで実施した。



図1 鹿島町位置図

II. 位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する講武盆地は、面積約180haの水田を有しており、半島部では、持田・川津平野とならんで広い耕地面積を有する。この盆地は、谷奥から流れ出す講武川によって作られた肥沃な地味により、古くから水稻耕作地として格好の条件を備えていたものと考えられる。

講武川流域条里制遺跡⁽¹⁾は、この盆地の中ほどの一帯が畔にその地割りをとどめるとされており、今回の調査の実施となったのである。

この盆地をめぐっては、縄文時代早期から中期にかけての佐太講武貝塚⁽²⁾が知られており、これは現在の佐陀川沿いに開けていた潟湖（『出雲國風上記』にいうところの「佐陀水海」、「恵雲陂」の前身）をそれぞれ南と西にひかえた立地であり、こうした潟湖からヤマトシジミなどの魚介類を採集し、周辺の山野に鳥獸や堅果類を求めていたものと思われる。

弥生時代前期後半に、この盆地西端に佐太前遺跡⁽³⁾が成立する。従来はこの集落を母集落として、講武盆地の開発が行われたものと考えていたが、今回の調査により、講武盆地内に縄文晩期からの人々の生活があったことが明らかになり、この地域の歴史像は見直しを迫られることになった。さらに弥生時代のうちには、この盆地から少し離れるが、「恵雲陂」の南岸の山ふところに銅鐸2、銅劍6を埋納した志谷奥遺跡⁽⁴⁾がある。再び講武盆地内に目を転じると、弥生時代中期の遺物を出土した名分塚出遺跡⁽⁵⁾、弥生時代後期から古墳時代前期の南講武草田遺跡⁽⁶⁾、南講武大日遺跡⁽⁷⁾など、点々と集落遺跡の存在が明らかになりつつある。また、四隅突出型墳丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡⁽⁸⁾が知られている。

古墳時代には講武盆地をめぐる丘陵上に数多くの古墳が築造されており、この時代までに盆地内の開発がかなり進んだことを示している。特に名分地域には、奥才古墳群⁽⁹⁾、鶴灘山古墳群⁽¹⁰⁾、名分丸山古墳群⁽¹¹⁾など前半期にさかのぼる群集墳が知られている。その他、時期などは不明であるが、径40m前後の古墳も知られてきている。古墳時代後期には、講武盆地のほぼ中ほどの北講武地区に横穴式石室を内部主体とする古墳も知られている。これら以外にも、横穴墓が多数分布することが知られており、古墳時代後期の段階には現在の集落の原形ができるものと考えられる。

奈良時代の『出雲國風土記』をみると、具体的な記述はないが、この盆地は島根郡の余戸里と生馬郷に、盆地西端の佐太前遺跡の立地した周辺は、秋鹿郡神戸里に含まれると考えられている。こののち10世紀に著された『和名類聚鈔』にあらわされる「多久郷」が、『風上記』の「余戸里」が一郷に昇格した姿とみられ、この間にさらに開発が進み、人口も増加したのであろう。この頃に前後して講武盆地の中心部に条里制が敷かれたと考えられ、現在でも「三ノ坪」、「八ヶ坪」、「十一」といった小字名も残っている。

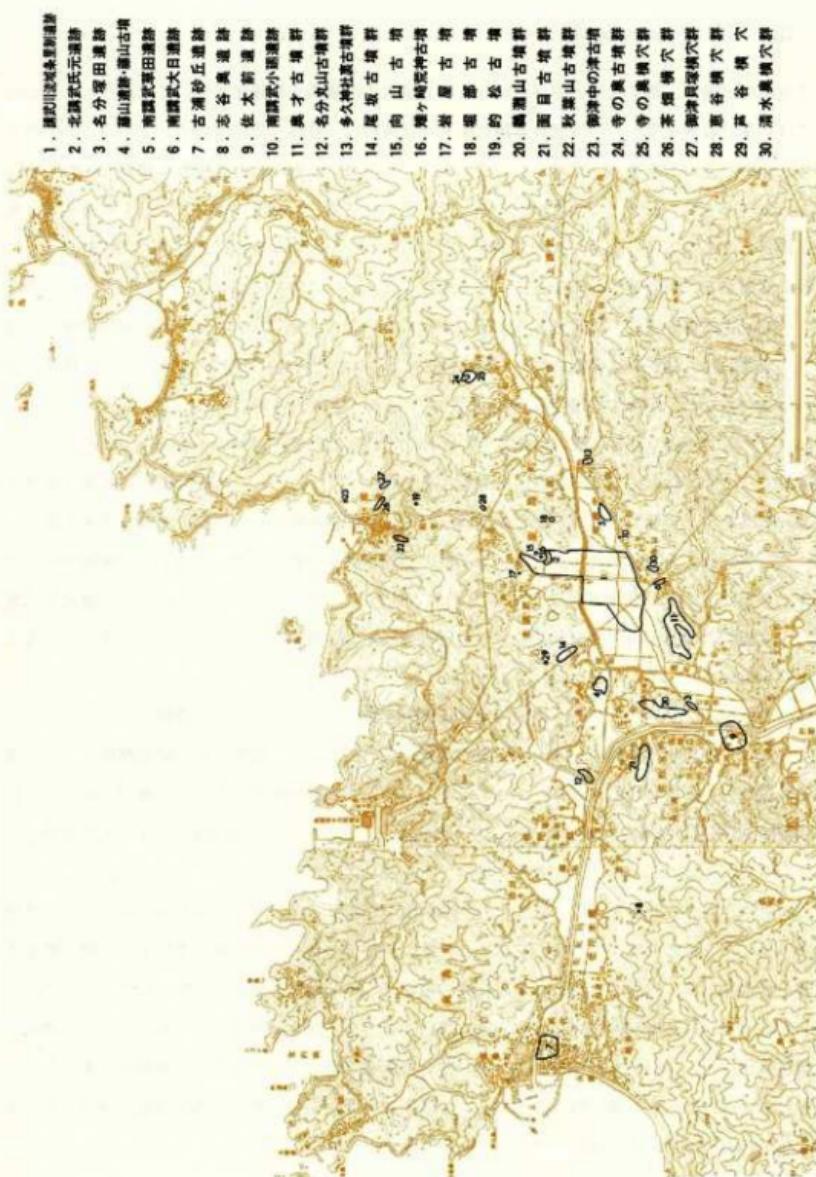


図2 周辺の遺跡 (1/50000)

III. 調査の概要

今年度の調査は、講武盆地の中ほどに存在する講武川流域条里制遺跡について実施した。この付近では、講武盆地を東から西へ流れる講武川もほぼ東西に一直線に流れている。また、このあたりでは、道路も東西、南北に一直線となっており、これらは古く敷かれた条里制を踏襲していることによるものと考えられる。この周辺の水田も整然とした区画になっているが、これも基本的には条里を踏襲したものではあるが、本来の姿とは考えられない。昭和30年頃に記録された畦畔とも、その後の度重なる区画整理事業のために大きく様相を異にしているのである。

この条里制遺跡の遺存が予想される水田に 2×2 mの調査区を30ヶ所設定して、試掘調査を実施した。調査区は、調査終了後埋め戻し、杭も除去するため、杭を国土座標にとりつけて、将来の調査に備えた。なお、本書中の調査区実測図は、左に西壁、右に北壁を示している。

このうち、第4調査区では縄文時代晚期から弥生時代前期の遺物が検出されたため、その広がりを確認するため、新たに4ヶ所調査区を増設した(第4-1、2、3、4調査区)。この第4調査区では、前述のように縄文時代晚期から弥生時代前期の包含層を検出し、土器、石器、黒曜石剝片、木片を採集した。4ヶ所調査区を増設した結果、遺跡は第4調査区北東にある向山丘陵緩斜面にその中心があり、これが向山丘陵直下の水田下まで広がっているものと考えられた(北講武氏元遺跡)。この遺跡の検出により、講武盆地での水稻耕作開始の時期はかなりさかのぼって考えられるようになった。

今回の調査の主な目的であった講武川流域条里制遺跡は、残念ながらその遺構を捉えることができなかった。度重なる講武川、中川の氾濫や昭和に入ってからでも数度に及ぶ区画整理により、遺構は残存しないものと判断せざるを得なかった。しかし、講武川南方および中川周辺で検出された厚い疊層や砂層は、度重なる両河川の氾濫を示しており、現在のような183haにも及ぶ水田地帯とするための労苦をしのぶには十分な資料を提供するものとはいえる。

この盆地をめぐる丘陵上には、数多くの古墳が築かれているが、今回の調査地の北方には、径38mの円墳である堀部古墳、横穴式石室があったことが伝えられる向山古墳、墳丘上に円礎が散乱する雉ヶ崎荒神古墳、封土が失われ石棺式石室が露出する講武岩屋古墳などが知られている。このうち、向山古墳、雉ヶ崎荒神古墳、講武岩屋古墳について測量調査を実施した。また、向山古墳出土の須恵器子持壺についても図化を行ったが、雉ヶ崎荒神古墳でこれに接合する資料を採集した。

また、周辺には、恵谷横穴群(3穴以上)も所在し、古くから一貫して講武盆地を開拓した人々の起居した場であることが明らかになったのである。



第1調査区

この調査区は、講武盆地から北へ入り込む地点に位置しており、水田面の標高は15.1mである。

この地表下約0.3mが、現在の水田耕作土であり、酸化した茶褐色を呈する粘質土である。この下にあるのが暗青灰色粘土で、この層の下から2本の暗渠が掘り込まれている。暗渠は東西にはしるもので、北側のものが雜木や板を使うもの、南側のものは径5cmの土管を使用するものである。暗渠が掘り込まれる暗灰色粘土中からは、古墳時代の土師器片が少量であるが出土した。層厚約40cmのこの層の下には、ごく薄い緑色の粒子を含む暗灰色粘土を挟んで、暗灰色粘土が堆積している。この層はごくわずかに砂を含んでいる。

土師器は、高杯脚部で、脚端部径は11.0cm、淡黄褐色を呈するものである。古墳時代前半頃のものと考えられる。その他に、土師器壺片、須恵器片がある。土師器壺片は、高杯とほぼ同じ頃のものと考えられ、須恵器は杯片である。

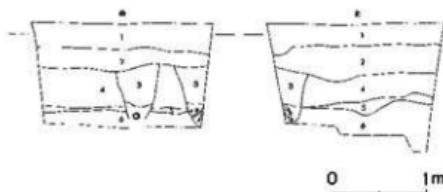


図4 第1調査区 (1/60)

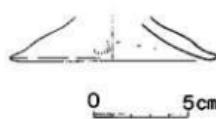


図5 第1調査区出土土師器

第2調査区

この調査区は、北から張り出す丘陵の裾に位置しており、水田面の標高は20.1mである。

地表から0.2mが現代の耕作土であり、この下層の暗青灰色粘土と、暗灰色粘土の間に黃灰色の薄い間層を挟んでいる。耕作土から、地表下約1mに及び、主軸を南北とする暗渠が掘り込まれている。暗渠材として、板を使用して通水をはかっている。さらにこの下層には、層厚0.5mの暗灰色砂質粘土および、砂礫層が堆積している。この砂礫層からは湧水が著しかった。

なお、本書中の調査区実測図は、左に西壁、右に北壁を示している。

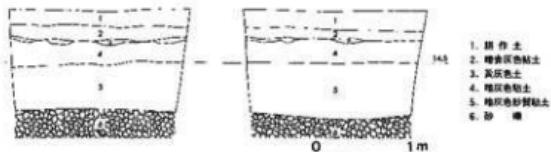


図6 第2調査区 (1/60)

第3調査区

この調査区は、講武盆地に張り出す向山丘陵の先端より45m西にあり、北へ細く入り込んでゆく谷のほぼ中央に位置する。水田面の標高は、13.9mである。

この地表から0.2mが耕作土で、この下に橙褐色土、淡灰色粘土、淡灰色粘土が、それぞれ0.2~0.3mの厚さで、ほぼ水平に堆積している。このうち、灰色粘土層内から、回転糸切り痕を有する須恵器杯1点が出土した。下部の淡灰色粘土層は、やや砂質で、この下層に砂礫層が堆積しているが、この2層の間に部分的に挟まれるように、淡緑色粘土層が存在する。ここでも、砂礫層からの湧水が苦しい。

出土した須恵器杯は、回転糸切り痕をとどめる底部片で、復元できる底径は8cmである。体部外面上にも糸切り状の痕跡をとどめる。体部内外面は回転ナデ、内面底部はナデ調整を施す。胎土は比較的密で、暗灰色を呈する。

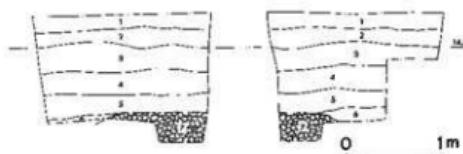


図7 第3調査区 (1/60)



図8 第3調査区出土須恵器

第4調査区

この調査区は、向山丘陵の先端直下の水田にあり、水田面の標高は14.3mである。周辺は、水田の形状やその標高から、微高地と考えられる地点である。

地表下0.2mが耕作土で、この下に褐色がかった灰色粘土、淡灰色粘土がほぼ水平に堆積する。この下層の灰褐色砂質粘土層以下が、遺物包含層となっている。

灰褐色砂質粘土層には、須恵器片を含んでおり、この下層には、部分的に灰色砂質粘土を挟んで、暗灰色砂質粘土層がある。この層の中は、炭化物を含み、弥生時代前期を中心とし、一部縄文時代晚期の遺物の包含層で、土器の他に石器、黒曜石片を含んでいる。調査区北側では、この土層の下に基盤層と考えられる粘性度の高い黄灰色粘土があるが、この層は、南に向かって降ってゆき、この傾斜中に緑色砂礫、暗灰色粘土、淡褐色有機土が堆積している。

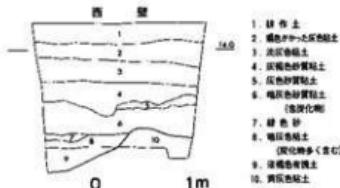


図9 第4調査区 (1/60)

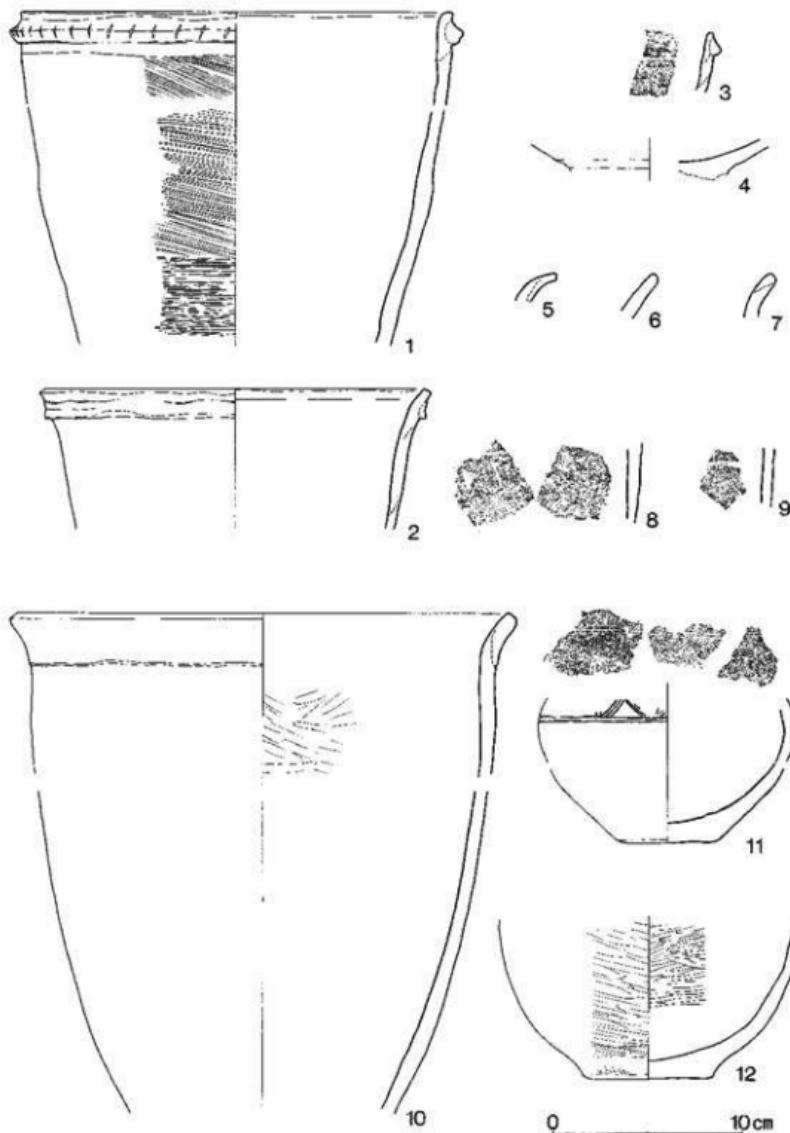


图10 第4調查区出土遺物実測図(1)

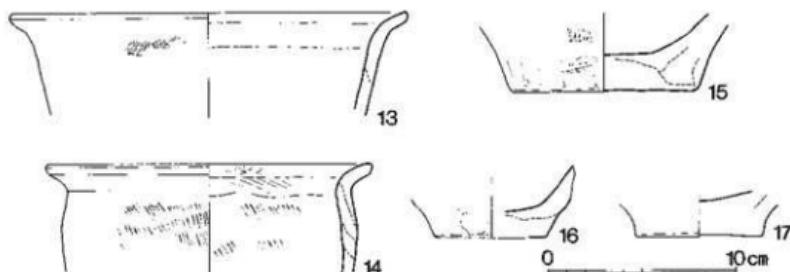


図11 第4調査区出土遺物実測図(2)

る。

弥生時代前期の包含層である暗灰色砂質粘土層と緑色砂層を挟んで存在する暗灰色粘土層は、炭化物をおびただしく含み、やはり弥生時代前期と、縄文時代晚期の遺物を含む。この層では、やや縄文時代晚期の遺物の比率が高くなる。この下の淡褐色有機土は、植物纖維の堆積した泥炭層となっている。この層からもわずかであるが、縄文晚期の土器片が出土した。

縄文時代晚期の土器は、(1～4)で、深鉢(1)は口径23cmを測るものである。口縁部に1条の貼付突帯をめぐらせており、突帶上には、刻み目を施す。体部内外面には横方向の条痕を施し、内面はこれをなでて消している。外面には厚くススが付着している。蓋あるいは深鉢の(2)も、口縁部に貼付突帯をめぐらせるもので、口縁端部はナデにより、シャープな平坦面としている。深鉢口縁(3)は、小片であるが、貼付突帯がある。深鉢などの底部と考えられる(4)は、底面が剥落している。以上(1～4)の縄文晚期の上器は、(4)を除いて、いずれも径1～2mmの石英、長石の砂粒を含む。(4)は精選されて密な胎土である。

弥生時代前期の土器(5～17)は、壺と甕である。口縁下に段をもつ壺(5)や甕(10)がある。甕(10)は、口径26cmに復元できるもので、口縁下の段から直線的にのびる体部をもつ。内面にはヘラミガキの痕跡をとどめる。壺(11)は、口縁部を欠くが、肩部にヘラ描きの2条の沈線と無軸と考えられる木葉文がある。壺(12)は、内外面とも丁寧なヘラミガキを施し、底部付近にハケメをとどめる。甕(13、14)は、ともにやや小形のもので、口縁下には段や沈線は認められない。底

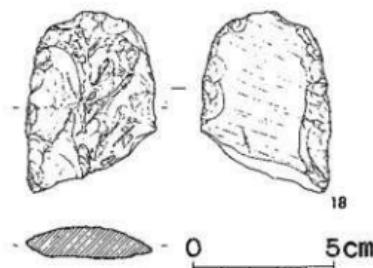


図12 第4調査区出土遺物実測図(3)(1/2)

部(16、17)は、いずれも平底のしっかりしたつくりのものである。以上、いずれも石英、長石など大粒のものを含んでいる。

石器(18)は、軟質の石材(玄武岩)を使用するもので、折損しているが、重量も20gと軽い。石歯状の石器の一部であろうか。表には4条の平行する擦痕をとどめる。裏面が主要剥離面である。緑色砂層下の暗灰色粘土層から出土した。

この調査区出土の縄文土器は晩期でも新しく、弥生土器は前期でも比較的古く位置付けられ、注目すべき遺物である。

第4-1調査区

第4調査区で検出した包含層の広がりを追求するために、第4-1、2、3、4調査区を設定した。

この第4-1調査区は、第3調査区と第4調査区の中間に設定した。水田面の標高は、14.3mである。

耕作土、青灰色粘土、暗灰色粘土、灰色粘土が、それぞれ約0.2mの厚さで水平に堆積している。灰色粘土中には木片などの有機物を少量含んでいる。

この下層に、厚く砂礫が堆積している。層厚0.5mまでは確認したが、さらに続いている。砂礫層は上半は緑灰色、下半は

暗灰色を呈する。この中間に薄く、部分的に有機物を含んでいる。砂礫層からは、著しい湧水を見た。

この調査区から摩耗著しい土器片が出土した。

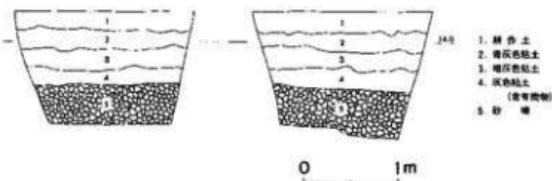


図13 第4-1調査区(1/60)

第4-2調査区

この調査区は、4-1調査区の南約30mの地点に設定した。水田面の標高は、14.0mである。

耕作土、暗青灰色粘土、褐色がかかった灰白色粘土、灰色粘土がほぼ水平に堆

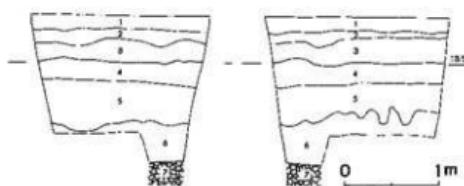


図14 第4-2調査区(1/60)

積する。それぞれの層厚は、0.2~0.3mである。この下層に層厚0.5mと厚い暗灰色粘土層が存在する。この層の下面には、かなりの凹凸がある。この下に厚さ0.4mの緑灰色粘土層があり、地表下約1.5mで砂礫層となっている。

第4-3調査区

4-2調査区の南50mに設けた調査区で、地表面の標高は13.3mである。

地表から0.15mが耕作土、この下に0.1mの堅い茶灰色粘土がある。この下層は、層厚0.5mに及ぶ灰色粘土層が存在し、さらにやや明るい暗灰色粘土、暗灰色粘土と続く。それぞれ層厚0.2mである。やや明るい暗灰色粘土

土層には、流木様の木片

1が含まれていた。

この下に緑灰色砂礫が
厚く堆積している。層厚
は、0.5m以上ある。この
層の中間に暗灰色粘質砂
層が含まれている。この
層には、木小片など、有
機物が多く含まれていた。

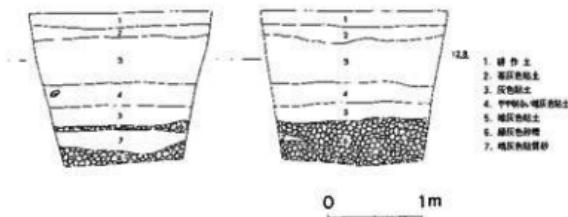


図15 第4-3調査区 (1/60)

第4-4調査区

第4調査区の南35mに設定した調査区で、水田面の標高は13.4mである。

地表から0.1mあまりの耕作土の下は、層厚0.3~0.4mの厚い淡茶灰色の粘土で、非常によくしまっており堅い。色調などから、後世の客上層である可能性がある。

この下に淡灰色粘土、灰色粘土、やや明るい暗灰色粘土が、それぞれ層厚0.1~0.3mの厚さで堆積している。この下層には、層厚0.5mの暗灰色粘土が堆積する。この下層も部分的に掘り下げたが、緑灰色砂質粘土で、他の拡張調査区のような砂礫層は検出されなかつた。

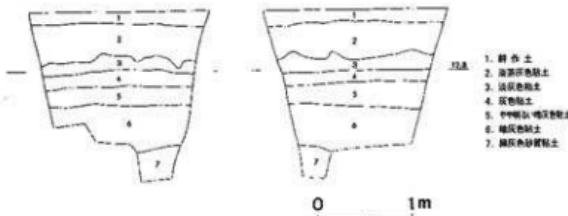


図16 第4-4調査区 (1/60)

第5調査区

第3調査区の南100mに位置する。水田面の標高は12.6mである。

土層は、耕作土、褐色がかった灰白色粘土、灰白色粘土、淡灰白色粘土が、ほぼ水平に堆積している。各層の層厚は、そ

れぞれ0.2mである。いず

れの層も非常に粘性度が
高い。

このうち、暗灰色粘土
層は、わずかに炭化物を
含んでいたが、いずれの
層からも、遺物の出土は
見なかった。

第6調査区

第4調査区の南100m、第5調査区の東90mに位置する調査区で、水田面の標高は、12.7mである。

土層は、厚さ0.1mあまりの耕作土の下に淡青灰色粘土、褐色がかった灰色粘土、灰白色粘土、暗褐色粘土が堆積している。それぞれ0.2~0.3mの層厚である。淡青灰色粘土層から、東西方向に暗渠が掘り込まれ、地表下0.8m付近に、竹を中心とする暗渠材が埋め込まれている。調査区北壁に沿うように、杭が1本検出された。杭の先端は暗褐色粘土層に及び、頂部は褐色がかった灰色粘土層内にある。この杭の出土位置は、暗渠の北辺に接している上、杭そのものも新しく、暗渠を布設する際に、暗渠材を固定するために打ち込まれたもの可能性がある。

杭は、長さ44.5cm、直径4.0cmの雜木の先端を尖らせたもので、刃物による切り

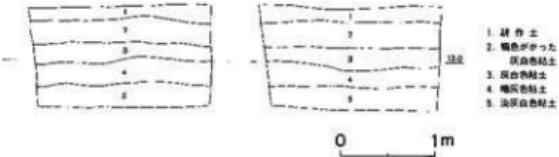


図17 第5調査区 (1/60)

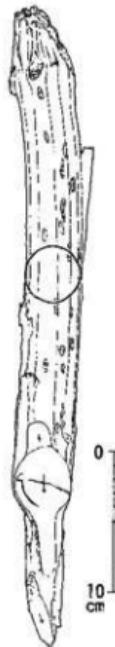


図19
第6調査区出土杭
(1/4)

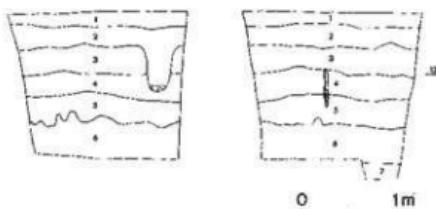


図18 第6調査区 (1/60)

口は鋭い。

その他に、ごく小片ではあるが、輪状つまみをもつと考えられる須恵器蓋の端部が、1片出土している。

第7調査区

この調査区は、第5調査区の南70mに位置し、水田面の標高は12.1mである。

層厚約0.2mの耕作土の下には、厚さ0.5mに及ぶ堅い暗青灰色粘土がある。この下層は、灰色粘土上、暗褐色粘土が、それぞれ0.2m、0.1mの厚さで堆積している。暗褐色土中には、有機物が少量含まれている。

この暗褐色土層と下の緑灰色砂層の間に挟まるように、やや砂質の淡褐色粘土層が部分的に存在する。緑灰色砂層の下部には、厚さ0.2mの砂礫層、緑灰色砂質粘土層と続く。

ここからは、ごく小片ではあるが、土師器
高杯あるいは鼓形器台
の脚端と考えられる破
片、および輪状つまみ
をもつと考えられる須
恵器蓋の端部が出土し
た。

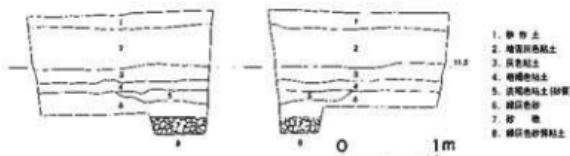


図20 第7調査区 (1/60)

第8調査区

第7調査区の南50mに位置する調査区で、水田面の標高は11.8mである。

耕作土の下に、層厚0.1mの灰赤褐色を呈するよくしまった粘土層がある。この下層に厚さ0.4mの暗灰色砂質粘土層、0.5mの灰色粘土層が堆積している。このうち、灰色粘土層にはわずかであるが、炭化物を含んでいる。

さらにこの下層は、厚さ0.1mの淡灰褐色粘土層を挟んで、緑灰色砂礫の堆積がある。

この調査区から遺物
の出土はなかった。

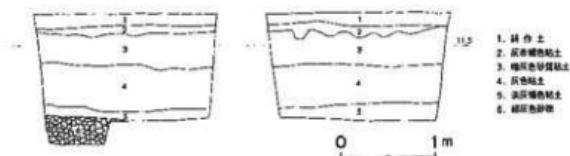


図21 第8調査区 (1/60)

第9調査区

第8調査区の南40mに位置し、講武盆地を東西に流れる講武川のすぐ北側である。水田面の標高は、12.1mである。

地表から0.2mの耕作土の下に、層厚0.4mに及ぶ厚い暗青灰色粘土、やや砂質の暗灰色粘土、暗灰色粘土、褐色ブロックを含む暗灰色粘土、砂層と堆積している。このうち、暗青灰色粘土とやや砂質の暗灰色粘土の間には、間層として茶褐色砂が、やや砂質の暗灰色粘土と暗灰色粘土の間には、灰色混土砂と灰色粗砂からなる間層が、それぞれ挟まっている。後者の間層は、下にある暗灰色粘土層の凹部に、比重の重い粗砂が沈澱した状況となっている。

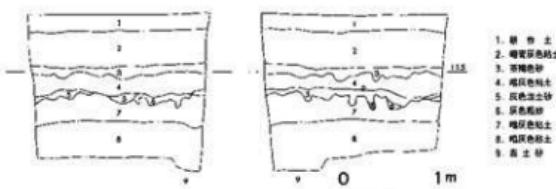
下部の暗灰色粘土層か

ら、中近世の櫛鉢片1片
が出土した。

第10調査区

第9調査区の東55mに位置し、講武川の北に位置する調査区である。水田面の標高は、12.4mである。

図22 第9調査区 (1/60)



耕作土に始まり、淡灰褐色粘土、灰褐色混土砂層、淡褐色砂、褐色がかった混炒灰色粘土が、それぞれ約0.2mの厚さで堆積している。淡灰褐色砂質粘土層と灰褐色混土砂の間に、青灰色粘土層が間層として部分的に挟まっている。また、淡褐色砂層の上面から、浅い暗渠が主軸を東西として掘り込まれている。暗渠材として、板を使用している。

これらの土層の下層には、炭化物をわずかに含む灰色粘土、褐色ブロックを含む灰色粘土、淡綠灰色砂質粘土が堆積している。このうち、褐色ブロックを含む灰色粘土層中から、繩文土器1片が出土した。

図23 第10調査区 (1/60)

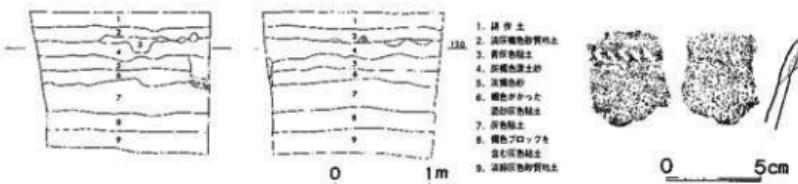


図24 第10調査区出土土器

この土器は、縄文時代晩期の深鉢口縁で、口縁付近に1条の貼付突帯をめぐらせるものである。淡灰褐色を呈し、径1mm前後の石英、長石などの砂粒を含んでいる。

第11調査区

第9調査区と講武川を挟んで南120mに位置する調査区で、水田面の標高は11.2mである。耕作土の下に薄い暗灰色粘土層が存在し、この下層に厚さ0.2mの礫層が堆積している。礫層の下は、大半が粗砂となっている。その下に厚い暗灰色粘土が存在し、灰白色粘土、灰色粘土、淡緑色砂、灰色粘土、灰白色粘土上、厚さ0.05~0.2m前後で堆積している。

地表近くに堆積する礫層は、講武川が氾濫した状況を示すものと考えられる。この礫層は、講武川の南岸にかぎって検出

されている。

この調査区では、著しい湧水をみた。

また、遺物の出土は認められなかった。

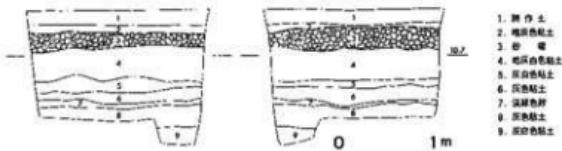


図25 第11調査区 (1/60)

第12調査区

第11調査区の東80m、講武川の南岸に位置する調査区である。水田面の標高は、12.3mである。調査区は、川に隣接するため、礫層、砂層がその殆どを占める。耕作土の下層には、厚さ0.4mにも及ぶ砂層、0.2mの礫層、0.1mの混砂粘土層、0.3mの砂層、さらに2層目の礫層が堆積している。地表から1.2mまでで、2層も礫層が検出され、それ以外の土層も殆どが砂層となっているこの調査区の様相は、度重なる講武川の氾濫をうかがわせるものといえよう。

また、各層から著しい湧水をみた。

淡赤褐色混土砂の上面から、主軸を南北とする深い暗渠が掘り込まれている。暗渠材として雑木を使用している。

この調査区からは、遺物の出土はなかった。

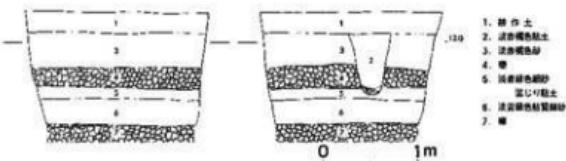


図26 第12調査区 (1/60)

第13調査区

第11調査区の南95mに位置する調査区で、水田面の標高は11.0mである。

耕作土の下に厚さ0.3mの灰色粘土層があり、この層から主軸を南北とする幅広い暗渠が掘り込まれており、ここからの湧水が著しいため、調査区を狭めて暗渠は掘り残した。

灰色粘土層の下には、やや暗い灰色粘土、暗灰色粘土、再びやや暗い灰色粘土、淡緑灰色混砂粘土が堆積している。このうち、暗灰色粘土層とやや暗い灰色粘土層中にはわずかであるが、炭化物を含んでいた。

この調査区からは、第11、12調査区で検出されたような疊層は認められず、各層にわたって粘性が高く、砂の混入もごくわずかであった。現在でも、若干排水が悪いようである。

この調査区からの遺物の出土は認められなかった。

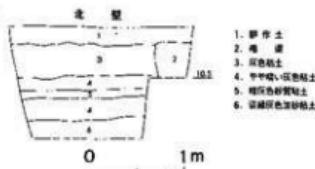


図27 第13調査区 (1/60)

第14調査区

第13調査区の東180mに位置する調査区で、水田面の標高は12.8mである。

耕作土の下層には、ごく薄い暗灰色粘土が堆積し、さらに層厚0.2mの灰白色粘土、砂疊層がある。この砂疊層は、厚さ0.2mで、上半が青灰色、下半が淡赤褐色を呈している。また、調査区西壁では、この層に幅0.6m、深さ0.3mの落ち込みが認められるが、遺構であるかどうかは、判然しない。また、反対側の東壁では、このような落ち込みは認められない。

この下には、層厚0.3mの淡灰褐色砂質粘土、0.4m以上の灰色粘土が、堆積している。

この調査区は、講武川、中川からそれぞれ100mと中間に位置する。ほぼ同様の立地の第13調査区で、疊層はおろか、砂層さえ検出されなかったことと対称的である。

この調査区からは、ごく小片であるが、土師質土器（カワラケ）の杯片が検出された以外に、採取された遺物はななつた。

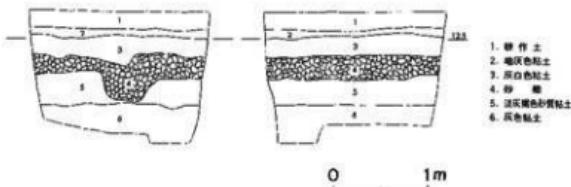


図28 第14調査区 (1/60)

第15調査区

第13調査区の南110mに位置する調査区で、講武盆地の南よりを西に流れる中川の北側にある。水田面の標高は11.2mである。

ある。

耕作上の直下には、ごく薄い暗灰色粘土層が存在し、この下の灰色粘土層の上面から、主軸を東西とする暗渠が掘り込まれている。灰色粘土の下には、淡灰褐色砂質粘土上、灰色砂、淡灰色砂質粘土が堆積する。このうち、灰色砂層は、上半が淡褐色を呈しており、この色調は、第11、12、14調査区で検出されている疊層と似かよっており、疊そのものは検出されないものの、疊層に対応する層である可能性がある。

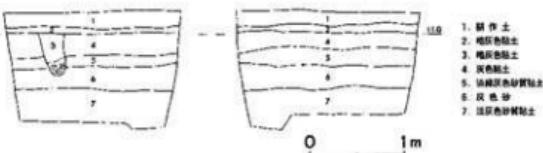


図29 第15調査区 (1/60)

第16調査区

第15調査区の東105mに位置する調査区で、水田面の標高は12.0mである。

耕作土の下に、ごく薄い淡灰色粘土層があり、茶褐色ブロックを含む淡灰色粘土、淡灰色粘土と続く。この下に、やや厚い灰色砂質粘土、淡灰色砂質粘土、暗灰色粘土、淡青灰色粘土が堆積している。このうち、灰色砂質粘土の上面は、茶褐色のやや堅い面となっている。第15調査区と同様、他の調査区で検出された疊層に似ており、対応するものである可能性がある。

この調査区から、磨石1が検出された。平面積円形を呈し、表裏とも摩耗して平滑な面となっている。また、側面に敲打痕をとどめる。緑灰色を呈し、長径15.4cm、短径11.2cm、厚さ6.5cmを測

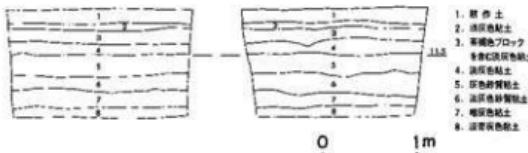


図30 第16調査区 (1/60)

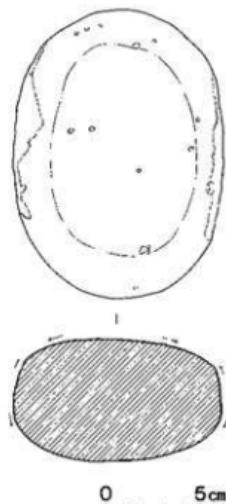


図31 第16調査区出土石器

る。石材は、安山岩である。

第17調査区

第15調査区の南70m、中川の南岸に位置する調査区である。水田面の標高は、11.0mである。

耕作土下の疊層から、主軸を東西とする暗渠が掘り込まれている。暗渠材として、板や雑木を埋めこんでいる。暗渠内の覆土は、礫を多く混えており、掘り上げた土をそのまま埋め戻したことが知られる。

疊層の下には、薄く暗灰色粘土があり、砂を含む茶灰色混砂粘土、混砂灰色粘土、緑灰色砂と続く。淡灰色粘土の上面は、西壁でかなりの凹凸が認められる。

調査区内の最下層であ

る暗灰色粘土層内には、

有機物を含み、わずかで
あるが土器片を含んでい
た。

土器片は、土師質土器
(カワラケ) 杯片と、内
外面にタタキメをもつ須
恵器壺の小片である。

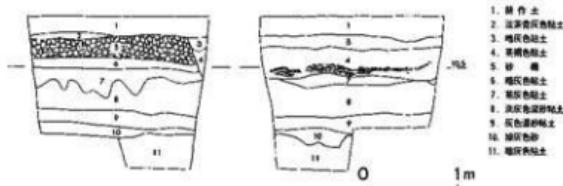


図32 第17調査区 (1/60)

第18調査区

第17調査区の東130m、中川の南岸に位置する調査区である。水田面の標高は、11.6mである。

層厚約0.2mの耕作土から、青灰色粘土、暗灰色粘土、灰色粘土とほぼ水平に堆積している。このうち、灰色粘土層内には、土器細片、炭化物、木小片をわずかに含んでいた。

この下層には、疊層が厚く堆積しており、この疊層に挟みこまれるように淡青灰色粘土層が認められる。

土器は細片であるが、大粒の砂粒を含むなど、胎土の特徴から弥生時代前期のものである可能性がある。その他、小片で

はあるが、炭化物や石と
ともに固化した黒壁片が
1点あった。講武盆地内
に窯跡などの窯業生産遺
跡がある可能性を考えら
れる。

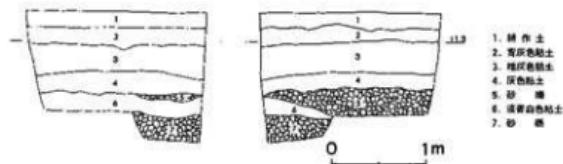


図33 第18調査区 (1/60)

第19調査区

第17調査区の南65mに位置する調査区で、水田面の標高は、10.3mである。

厚さ0.2mの耕作土の下に、青灰色粘土、灰色粘土、暗灰色粘土、再び灰色粘土と堆積する。それぞれ0.1~0.3mの厚さである。

これらの土層の下部、調査区最下層には、茶褐色砂礫が堆積し、これに部分的に切り込むように青緑色砂が堆積している。最下層の砂層、疊層からはかなりの湧水をみた。

この調査区からは、□

縁端部を肥厚させる単純

口縁の上師器口縁の小片

1、黒曜石の剥片1が出

上した以外、出品はな

かった。

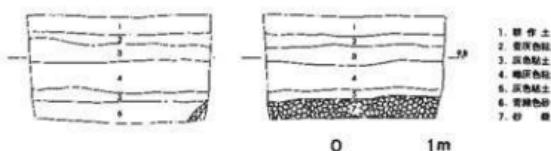


図34 第19調査区 (1/60)

第20調査区

第18調査区の東20mに位置する調査区で、水田面の標高は11.9mである。

耕作土下に薄く青灰色粘土と厚い灰色粘土が堆積している。この灰色粘土層上面から、主軸を南北とする暗渠が掘り込まれている。この暗渠は、溝底に両側面、蓋と3面を板で囲むもので、この中を水が流れるようにしておらず、現在も大量の水が流れている。このため、この暗渠は撤去せず掘り残した。

この下層にある暗灰色粘土層は、炭化物、遺物を少量含んでいる。また、調査区北辺では、中間に淡青灰色粘土を間層として挟んでいる。この間層と同様な土層が、暗灰色粘土層の下層に堆積している。

暗灰色粘土層から検出された遺物は、器種、時代ともに不明の小片1片のみであるが、胎土内に比較的大粒の砂粒を含むもので、あるいは弥生時代のものである可能性がある。それ以外に採取された遺物はなかった。



図35 第20調査区 (1/60)

第21調査区

講武川の南岸、第11調査区の西250mに位置する調査区で、水田面の標高は9.3mである。

耕作土の下には厚さ0.2mの暗灰色砂質粘土、灰色砂質粘土があり、この間に淡緑灰色砂が厚さ0.1m前後で凹凸をもちながら、薄く挟まれている。この下層に薄く緑灰色混砂粘土と、厚さ0.2mの緑灰色砂層が堆積している。

このうち緑灰色砂層は細砂からなるが、中間に粗砂を帶状に含んでいる。この下には、軟質で有機物を多く含む暗灰色粘土が厚く堆積している。

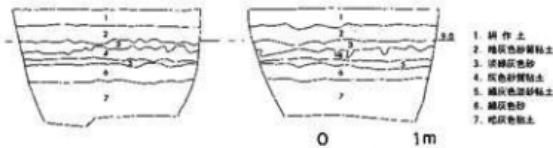


図36 第21調査区 (1/60)

第22調査区

第21調査区の東110m、講武川の南岸沿いに位置する調査区である。水田面の標高は9.9mである。

耕作土下に暗灰色粘土、黄褐色ブロックを含む暗灰色粘土、淡青緑色砂が堆積する。暗灰色粘土上面から、主軸を南北とする暗渠が掘り込まれているが、調査区内にはごくわずかにかかっているだけである。

この下に堆積する暗灰色砂質粘土層内には、炭化物や木小片を含んでいる。この土層は、上下にかなり凹凸がある。この下にある厚い灰紫色粘土は堅く、よくしまってい る。

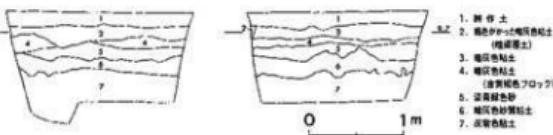


図37 第22調査区 (1/60)

第23調査区

第21調査区の南115mに位置し、水田面の標高は、9.0mである。

耕作土下に灰色、淡灰色粘土が堆積する。それぞれよくしまっており、堅い。この下に厚い0.4mの褐色を呈する砂礫および青緑色の砂礫層が堆積する。これらの層の上面には、淡青灰色砂が薄くかぶっている。

この調査区からの出土遺物はなかった。

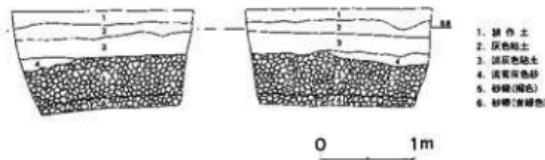


図38 第23調査区 (1/60)

第24調査区

第22調査区の南70mに位置する調査区で、水田面の標高は9.8mである。

耕作土下に厚さ0.2mの暗灰色砂質粘土層があり、この下にある灰色粘土層は上面に凹凸があり、この凹凸に綠灰色細砂が充満している。この砂層を除去した段階で、調査区内中央部と北東隅付近で、2本の杭が検出された。中央にある杭1は、綠灰色細砂上面に頂部を有し、灰色粘土下面に到っている。北東隅の杭2は長く、頂部が綠灰色細砂内にあり、先端は深く、褐色がかった灰色粘土層内にある。この褐色がかった灰色粘土層は、0.6m以上の厚さがあり、よくしまっており堅い。

杭1は、雜木の先端を尖らせたもので、残存長35.8cm、径4.6cmを測る。杭2も、雜木の先端を鋭く尖らせたもので、残

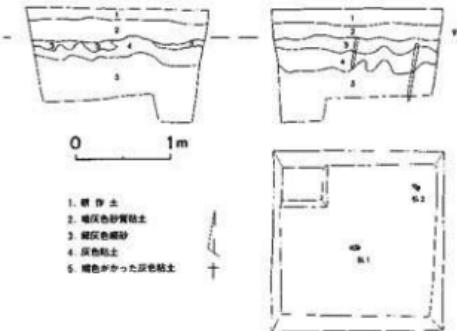


図39 第24調査区 (1/60)

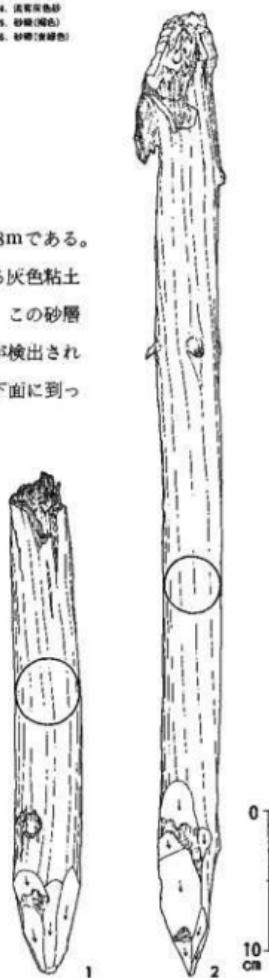


図40 第24調査出土杭 (1/4)

存長68.8cm、径4.0cmを測る。この2本の杭に伴う遺物は検出されておらず、時代を特定することはできない。しかし、比較的浅い地点から検出されていることから、さほど古さがあるとは考えられない。一方、第6調査区から検出されている杭と比較すると、この調査区出土のものは木質の腐朽が著しく、第6調査区のものよりは古い。

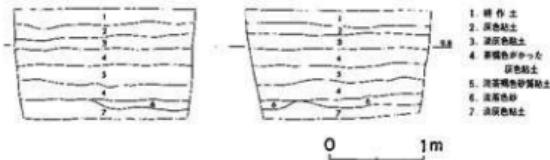
第25調査区

第23調査区の南100m、中川の北岸に位置する。水田面の標高は10.2mである。

耕作土下には、灰色粘土、淡灰色粘土、茶褐色がかった灰色粘土、淡茶褐色砂質粘土、茶褐色がかった淡灰色粘土が、それぞれ層厚0.15~0.2mの厚さでほぼ水平に堆積している。これらの土層はいずれも一様に砂を含んでいる。

調査区最下層には、淡

灰色粘土が堆積している
が、この上面に部分的に
厚さ0.1m前後で、淡茶色
砂がかぶさっている。



この調査区からの出土
遺物は認められなかった。

図41 第25調査区 (1/60)

第26調査区

第24調査区の南110mに位置する調査区で、水田面の標高は10.2mである。

耕作土下に、灰色粘土、淡灰色粘土が、それぞれ0.2m前後の厚さで堆積しており、この下に約0.1mの厚さの淡緑色がかつた淡灰色砂質粘土を挟んで、わずかに褐色がかつた淡灰色粘土上層が続き、よくしまった疊層となる。この疊層から、使用痕のある石が1点出土した。

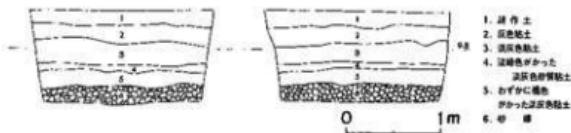


図42 第26調査区 (1/60)

第27調査区

第25調査区の西85mに位置し、講武川と平行して流れる中川が、講武川とともに大きく屈曲する地点の北岸に設定した。水田面の標高は、9.7mである。

耕作土下に薄い粘土層を挟んでおり、その下に薄い疊層がある。その下には層厚0.3mの粘土層を挟んで、再び厚さ0.2mの疊層となる。この層の下部には、層厚0.5m以上に及ぶ厚い砂層が存在する。このように、中川に隣接するこの地点では、度重なる氾濫を示す砂層や疊層が、くり返し堆積しており、古くから湿润な場所であったことが想像できる。現在でも著しい湧水をみた。

また、耕作土下の青灰

色粘土層から最下の淡緑
灰色砂層に届く深い暗渠
が掘られている。暗渠材
として、樹脂様のパイプ
が使用されている。

この調査区からの出土
遺物はなかった。

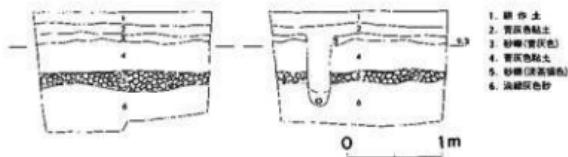


図43 第27調査区 (1/60)

第28調査区

第19調査区の西30m、中川の南方に位置する調査区である。水田面の標高は10.0mである。
この調査区では層序は単純で、耕作土の下に層厚0.3mの暗灰色粘土、0.2mの黒褐色粘土、0.5mの暗褐色粘土、やはり0.5mの淡緑灰色粘土が堆積しており、この下に疊層が検出された。

このうち、黒褐色粘土層内には、有機物を含み、暗褐色粘土層内にもやはり有機物を含んでおり、土師質土器および曲物片を検出した。

また、調査区内には、主軸を南北とする暗渠が2本平行して検出された。特に東側のものは、湧水が著しいため、その部分については調査区を狭めて掘り残した。

暗褐色上層内で検出した土師質土器は、口径12cm、底径5.5cm、器高4cmの杯である。底部を回転糸切りで切り離し、内外面とも回転ナデで仕上げている。胎土は砂質で、淡橙色を呈する。曲物片は、幅約2cmの板材の1面にタテおよびナメの切り込みを入れている。

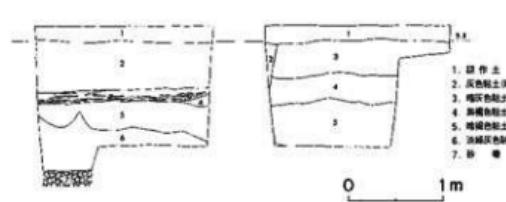


図44 第28調査区 (1/60)



図45 第28調査区出土土師質土器

第29調査区

講武盆地の南端に設定した調査区で、この南にある小谷から張り出す小規模な扇状地の末端に位置している。水田面の標高は9.2mである。

耕作土下には、暗青灰色、灰色の粘質土がそれぞれ0.2mの厚さで堆積している。これ以下は、砂層ないし砾層で、調査区南の谷から流れ出した土砂が、厚く堆積していった様子をうかがうことができる。

粘質土下に堆積する黄褐色砂層は、層厚0.5mに及ぶもので、上部の5~10cmが白色を呈している。この層の下面、南東隅で径8cm、長さ約90cmの流木が1本検出された。この層の下には、ごく薄く淡暗褐色粘土が堆

積しているが、調査区

南西隅でのみ、検出さ
れた。

この下に厚さ0.2m

の淡緑灰色の混礫砂層
を挟んで砾層となる。

この砾層中で、南北に
横たわった流木が検出
された。流木は、太さ
約50cmのもので、根に
近い部分のものである。

樹種は、常緑のアカ
ガシで、ドングリ様の
堅果もあわせて検出し
た。この流木は、炭化
が進んでおり、かなり
古く埋没したものと考
えられた。

第30調査区

第27調査区の南西200m、講武盆地の中心部からやや西に偏した位置で、中川の北側に設定した。
水田面の標高は8.6mである。

耕作土以下の土層は、最下層の灰白色粘土を除いて、いずれも砂を含んでおり、第27調査区と同

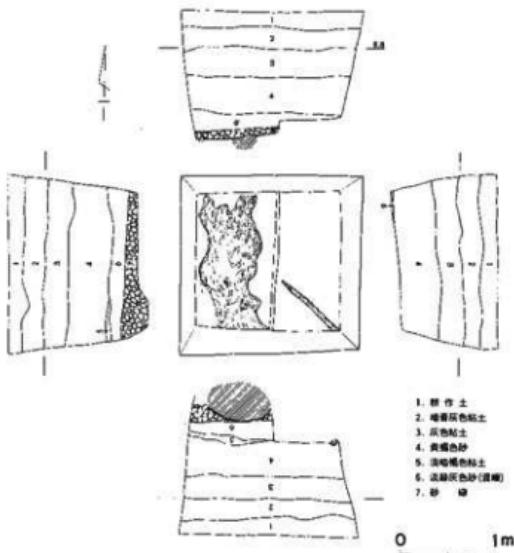


図46 第29調査区 (1/60)

様、中川沿いで河川が氾濫した状況を示すものと考えられる。

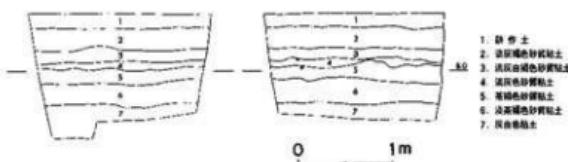


図47 第30調査区 (1/60)

IV. 周辺の遺跡

今年度の分布調査事業では、講武川流域条里制遺跡を見下ろす北講武地内の丘陵上に位置する古墳の図化作業を行い、あわせて、その出土資料についても図化を行った。

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	種別	名 称	摘要
1	散 布 地	北講武氏元遺跡	今回の分布調査で発見。縄文時代晚期～弥生時代前期の包含層。
2	古 墓	講武岩屋古墳	丘陵斜面。切石造りの横穴式石室。
3	古 墓	向山古墳	丘陵尾根上。消滅。横穴式石室であったと伝えられる。須恵器子持壺、埴輪、甲冑片？
4	古 墓	雉ヶ崎荒神古墳	丘陵端突に小規模な墳丘が残存。墳丘上に円礫が散乱する。
5	古 墓	堀部古墳	丘陵尾根上。径38mの円墳。造出しを有する。
6	—	—	向山古墳のものと伝えられる石材1。開墾の際に引きあげたものという。
7	—	—	向山古墳のものと伝えられる石材1。橋として転用されている。

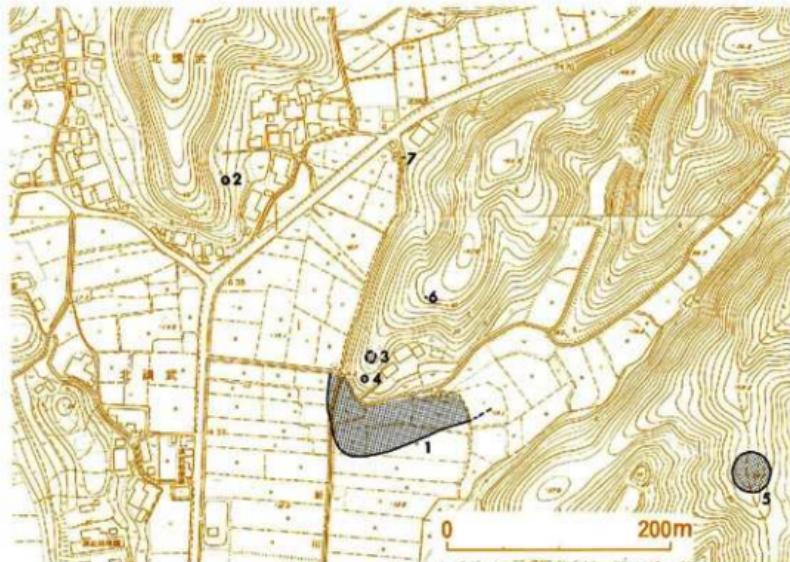


図48 周辺の遺跡位置図 (1/5000)

講武岩屋古墳

講武盆地のほぼ中央で、盆地が大きく北側の山ふところへ入ってゆくが、その水口を見下ろす丘陵斜面、標高約28m付近に位置する古墳である。ここからは、講武盆地の中央部東半を見わたすことができる。また、向山古墳、猪ヶ崎荒神古墳のある向山丘陵を正面にのぞんでいる。

古墳は、丘陵斜面に立地する山寄せのものであったと考えられるが、封土が全く失われているため、墳形は明らかでない。露出する石室の後面には、後世の掘削を受けてはいるが、現状で高さ約4.5mを測る斜面を大きくカットした部分が長さ約40mにわたって認められる。このカット面、石室の位置および石室周辺の平坦面の広さから推定して、墳丘は10m前後の小規模なものであったと考えられる。

石室は、凝灰岩の切石からなり、玄室と羨道の一部を残し、S(磁南) -24°- Eに開口する。周辺には羨道部分のものと思われる石材が散在している。

玄室は床石、玄門部をのぞく各壁、天井石を一枚石で構成され、幅1.35m、奥行1.90m、高さ1.5m(推定)を測る。石材は、奥壁と玄門部を両側壁で挟む組合せとなっている。石材の組合せにあたっては、側壁の奥壁と接する部分をわずかに突出させ、また、玄門部では、袖石、楣石を受ける部分を側壁に浅い削込みとして握り込んでいる。この削込みは、羨道側壁にも認められる。玄室側壁下部には、約4cmの張り出した段がある。これは、床石と対応するものと考えられる。床石は1.3×0.8mの石材が一枚、奥壁に立てかけられた状態で残存するが、本来は2枚以上の石材からなっていたものであろう。床面にあけられた盗掘坑および、石室外曲面東側では、側壁の下に敷かれた根石が観察できる。玄門部は、両袖石、楣石の石材で構成され、玄門は高さ0.98m、幅は上端で0.64m、下端で0.69mを測る。袖石の下部は、羨道床石をうける削込みが浅く施されている。天井石は内面を家形に加工し、棟の線が妻入りに表現されている。外面はかまぼこ形に形を整えてある。

羨道は、左側壁、床石が残存する。前述したが、側壁には玄門袖石を受ける浅い削込みがある。床石は、縦長の石を基調に構成されており、玄門部分では袖石の形にあわせて、全体として「凸」字状に形を整え、袖石の間に組み込んでいる。また、玄門の左側の袖石との組合せに際し、小石がかまされていている。羨道の規模は、幅1.3mを測るが、長さは、羨道前方に残存する羨道閉塞石あるいは闇石と考えられる石材から推定して、1.9m程度と考えられる。

玄室内からの出土品は知られないが、羨道前方約2mの地点で須恵器高杯脚部片を採集した。三方に一段の透しを有する低脚のものであろう。¹⁰山陰の須恵器編年Ⅳ期にあたるもので、石室の形状から想定される古墳時代後期後半の年代観とも矛盾しない。

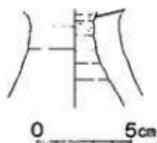


図49 講武岩屋古墳
周辺採集須恵器

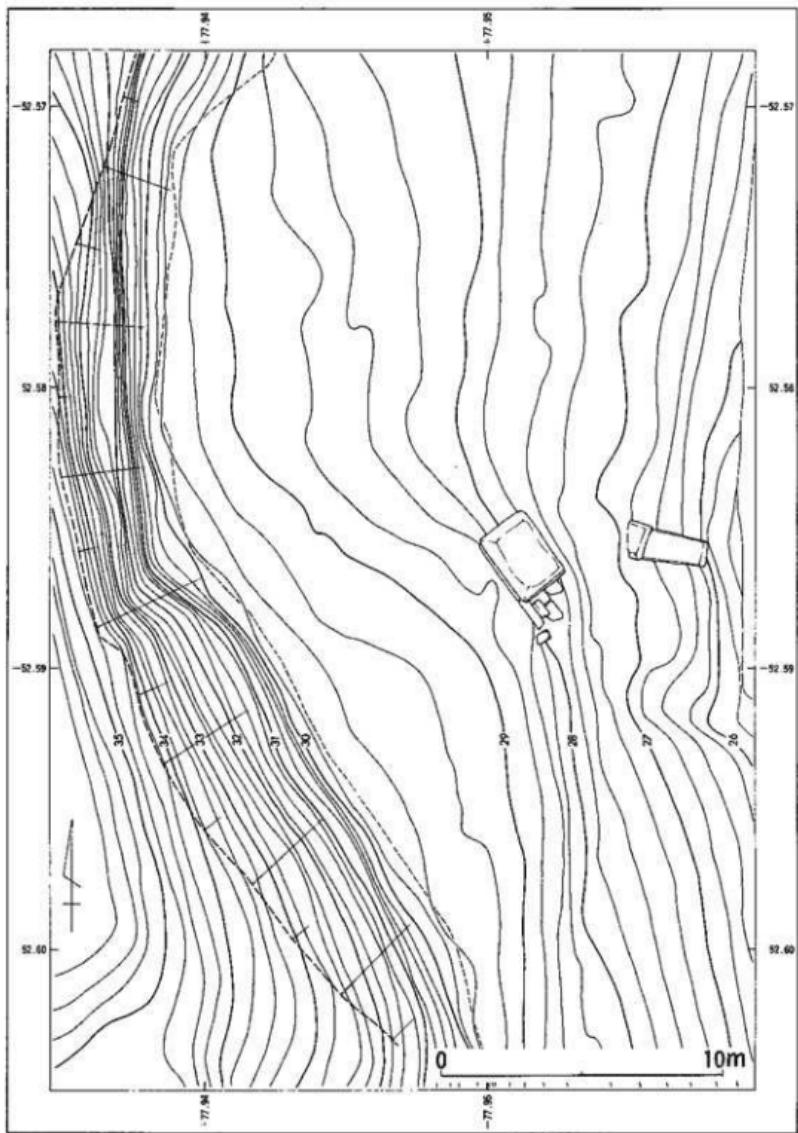


図50 講武岩屋古墳周辺地形測量図 (1/200)

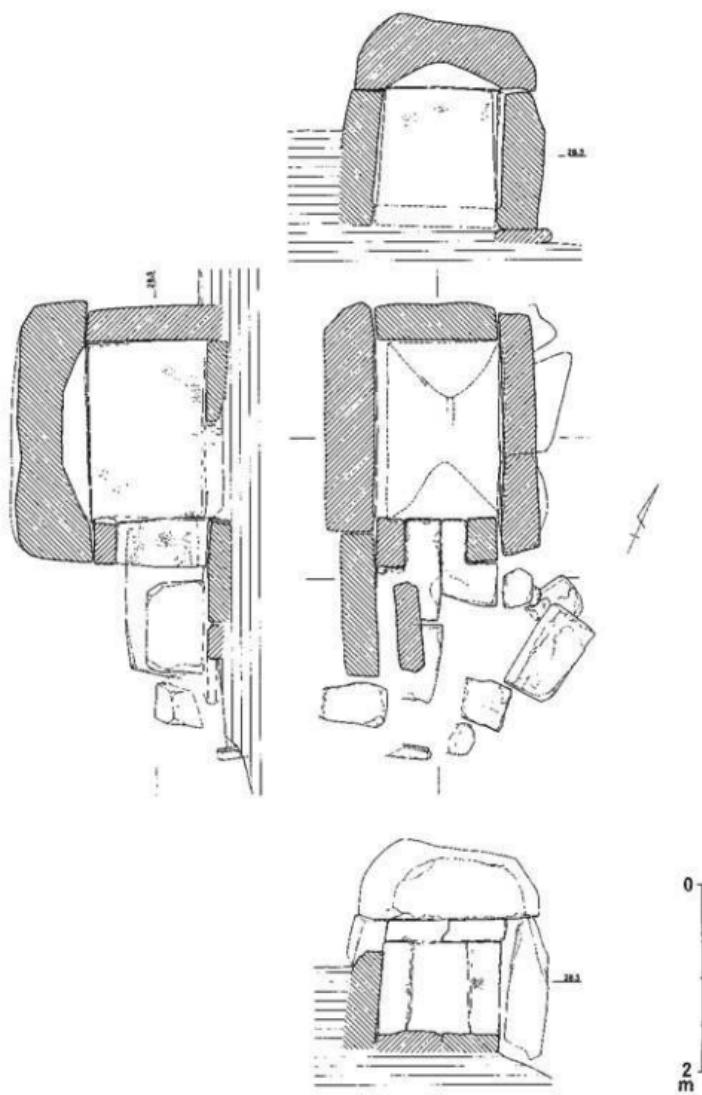


図51 満武岩屋古墳石室実測図 (1/60)

向山古墳

講武岩原古墳の位置する丘陵の東側に對面するように存在する丘陵上にある。丘陵は、講武盆地に向かって標高30mに満たない比高14mの低い尾根を突出させるが、この尾根上に向山古墳、雉ヶ崎荒神古墳が位置している。

向山古墳は、現在は開墾されて茶畠となっており、全くその面影をとどめない。この丘陵の開墾は、大正年間に稲畠を作るために行われ、その際に横穴式石室が発見され、解体されたと伝えられている。その際の石材が、同丘陵の約15m高い地点までひきあげられており、もう1点は、丘陵下を流れる小川に石橋として架けられている(図48、6・7地点)。

現状は、なだらかな尾根が残っており、点々と埴輪片が採集できる。この地形からは、山状は想像できないが、尾根の幅等を考えると、20m未満の墳丘しかこの地点には築きえなかつたと考えられる。

ここからは、須恵器子持壺と鉄劍の出土が伝えられるが、鉄劍については、今回その所在を明らかにできなかった。

この古墳出土の須恵器子持壺は、昭和20年代後半頃、土地所有者である古瀬美延氏によって島根大学へ届けられ、山本清氏によって復元されて、同氏の「山陰の須恵器」(『島根大学開学記念論集』1960年)に比較的古式の装飾付須恵器として紹介されている。今回の測量調査に際し、雉ヶ崎荒神古墳墳丘上に括された状態で、須恵器子持壺および埴輪片、須恵器題片、鉄片が採集された。採集時の状態から、丘陵開墾時に出土した遺物を一時的にこの古墳上にまとめておいたものと考えられ、島根大学に搬入された残りのものと考えられる。子持壺破片には、これまで発見されていなかつた親壺口縁部をはじめ、壺胴部、脚端部片があり、復元にあたって石膏が充填されている部分のかなりの部分を補うものである。

これによって、子持壺は復元が可能となったが、図上での復元は、図53のとおりである。全高56cmを割り、最大径27.5cmの玉ねぎ形の親壺に高さ約30cmの脚部が付き、肩部に5個の子壺を配している。親壺には底部はない。

口縁部は、蓋を受けるための立ち上がりと、受けをもつもので、立ち上がりは高く、しっかりとたつくりである。この部分には、他の部分のように自然釉や灰が被っておらず、少なくとも、焼成の段階までは蓋を伴うものであったことがわかる。頸部には、板状の工具の刺突による列点が施される。

子壺は、高さ6.5cm程度、口径は10cm余である。口縁外面に1条の沈線と段をもっている。頸部からわずかに張りをもつ体部に至る。いずれも穿孔され親壺と通じている。

親壺は内外面ともにタクキで成形し、この上にカキメを施して調整している。このカキメは脚と

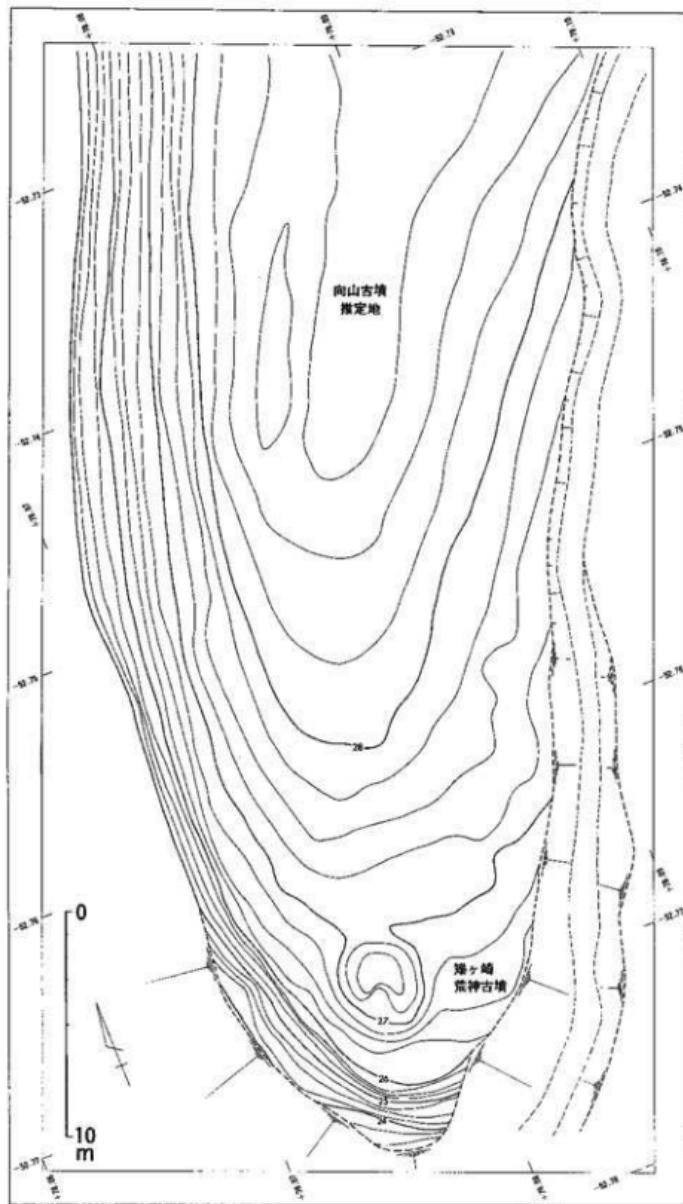


図52 向山古墳、雉ヶ崎荒神古墳周辺地形測量図 (1/250)

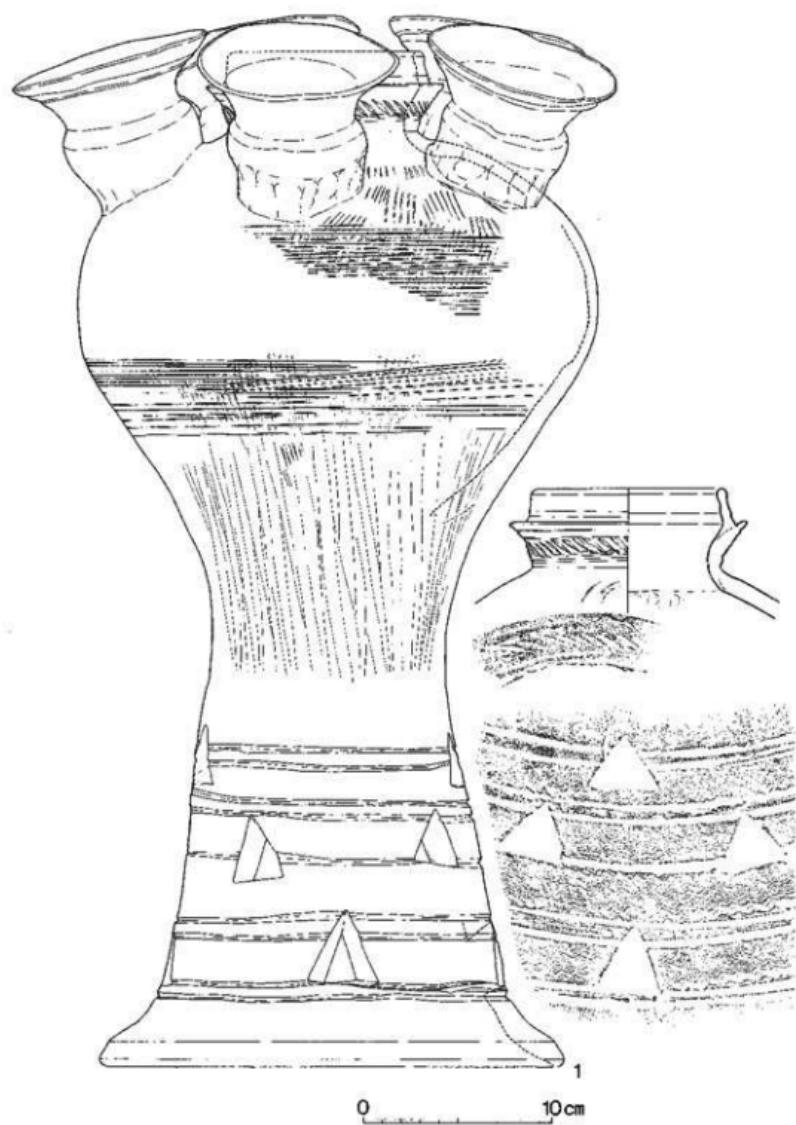


図53 向山古墳子持壺 (1/3)

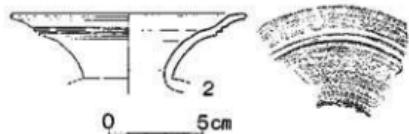


図54 向山古墳墓室測図
(子持壺蓋の可能性がある)

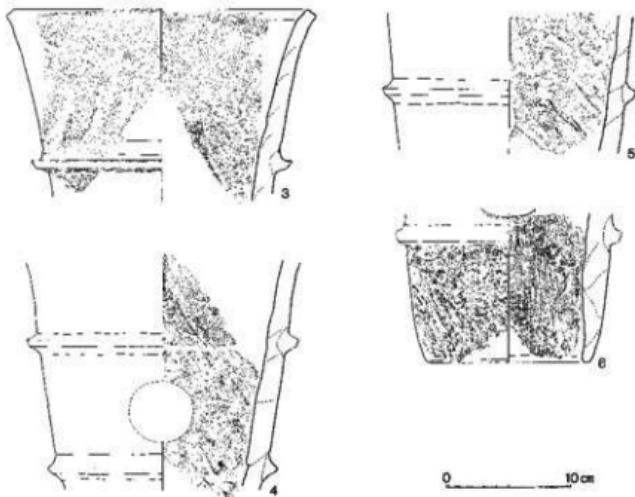


図55 向山古墳墓室測図 (1/4)

の接合部にあるタテ方向の強いナデによって消され、また、外側の強いナデの裏側にも壺としての成形時のタタキが残ること、さらにこの部分の断面観察から、それぞれ別個に作られた壺と脚が接合されたことがわかる。子壺はカキメを施した後に接合されているので、手順を考えると、おそらく親壺と脚の接合ののち、付けられたものであろう。

脚部は、下半に2本単位を基調とする沈線が5段めぐらされ、この単位間に細かいクシ書きの波状文が施される。また、この部分には、三角形の透しが3段に穿たれている。上段は3方、中、下段は4方からの穿孔である。

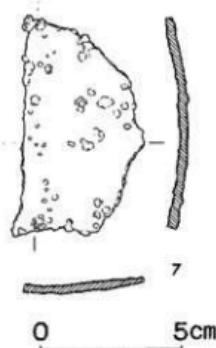


図56 向山古墳鉄片 (1/2)

(2)は、墓の口縁から頭部にかけてと考えられる破片である。

腹部から大きく開く短かい口縁である。口縁下に深い2本の沈線を施し、この下から頭部一杯に細かい波状文を描く。外面には厚く自然釉がかかり、光沢のある黒色を呈する。これは、子持壺の蓋の一部である可能性がある。(小結、注23番参照)

(3～6)は埴輪で、完形に復元できるものはないが、高さ35cm、口径25cm、底径15cm程度で、2段のタガを有し、中段に1対の円形の透しを有するものと考えられる。

(3)は、口縁部からタガ部までの破片で、内外面ともナナメのハケメを施す。タガの突出度は高い。(4)は中段付近の破片で、2段のタガとわずかであるが透しの一部がみえる。外面は風化が著しいが、かすかにナナメのハケメが認められ、内面では上半に深いナナメのハケメ、下半はこれを丁寧になでて消している。(5)もやはりこの付近の破片で、外面にかすかにナナメのハケメ、内面にはナナメのハケメが施されている。(6)は某底部で、外面はクテ方向に強くなられ、内面は上方でハケメが、下半は底部調整が施される。これと直接接合はしないが、同一個体と考えられる破片には、中段に二次調整としてのヨコハケが施されている。

以上の埴輪には、須恵質の焼き上がりを呈するものはないが、黒斑を有する破片もなく、窑窓で焼成されたものである可能性がある。

(7)は鉄片で、長辺7.7cm、短辺4.3cm、厚さ0.2～0.3cmのものである。ゆるやかな球状のカーブを呈し、甲冑の破片である可能性がある。

以上、これらの遺物は、子持壺口縁部の形状から、山陰の須恵器編年II期に相当するものと考えられる。伴出する埴輪も、底部調整をし、一部ヨコハケを施すもので、これは奥才1号墳¹⁰で出土したものに近い。ここからも山陰の須恵器編年II期の蓋杯が出土している。

これらの遺物は、雄ヶ崎荒神占墳墳丘上で採集されたもので、荒神古墳の遺物が混入している可能性もあることを注意しておきたい。

また、このように向山古墳の時期を考えるならば、割石積の横穴式石室と伝えられる主体部についても再考を要することになろう。

雄ヶ崎荒神古墳

向山丘陵の先端部に位置し、眼下には講武盆地を広く見わたすことができる。古墳は標高約27m前後に位置している。

墳丘は、現状では径約4～5mの円墳状を呈するが、後世の著しい削平を受けているものと考えられ、墳丘上面におびただしい円礫が散乱しており、これは、この古墳の主体部であった礫床が、削平によって露出してしまったものと考えられる。このことから、本来古墳は今よりも大きな墳丘を有していたものと考えられる。露出する礫は、こぶし大のものから径3～4cmのものであるが、3～4cmのものが大半を占める。また、図版23上段にみると、比較的大形の円礫もみとめられ、

こういった石は、奥才古墳群の調査例によれば枕石として使われることが多い。

前述のように、この墳丘上からは、向山古墳出土と伝えられる須恵器了持壺に接合する資料などが採集できた。遺物は、わずかに残る墳丘の北端近くにまとめられた状態となって、地表に散乱していた。

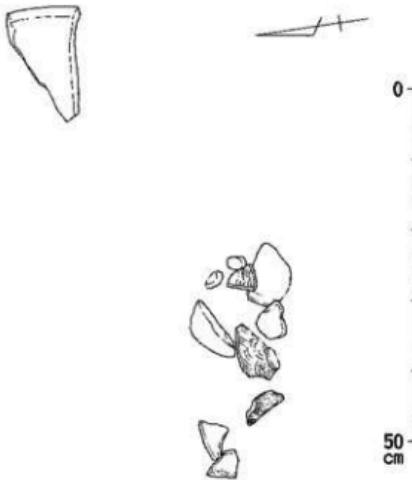


図57 猿ヶ崎荒神古墳遺物採集状態（1／8）

V. 小 結

今年度の分布調査事業では、講武川流域条里制遺について実施したが、条里については明瞭な遺構を検出することができなかった。しかし、計34ヶ所設けた調査区のうち、25ヶ所で砂層や疊層の厚い堆積が検出され、現在のような水田地帯になるまでに講武川、中川の度重なる氾濫があったことが知られた。この結果は、講武盆地中心部ばかりでなく、昨年度調査を実施した南講武草田遺跡でも確かめられており、現在のような安定した沖積地となるまでには、かなりの災害をこうむったことがわかったのである。また、第29調査区での太いアカガシの流木の検出は、こういった事情の一端を窺せるだけでなく、講武盆地に開発の植生がひびく以前の環境や植生についても考察する材料を提供するものといえよう。

北講武氏元遺跡

第4調査区で検出した包含層（北講武氏元遺跡）からの出土遺物は、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのもので、この盆地での農業集落の成立が、弥生時代前期、あるいは縄文時代晩期にまで溯りうる可能性があることを示した。第4調査区とその周辺に増設した調査区により、この遺跡は、北からのがる丘陵の東側緩斜面に当時の集落があり、それが現在の水田下まで続いているものと考えられた。周辺の地形からは、それほど大きな集落があるとは考えられない。今回出土した弥生土器は、調査区がごく限られたものであったことから、多くはみていないが、壺は口縁部に段を有するもので、前期でも比較的古式のものである可能性がある。これまででは、古浦砂丘遺跡付近に成立した農業集落が、佐太前遺跡（弥生時代前期後葉～）に分村し、この集落を母集落として、弥生時代中期に名分塚田遺跡、南講武大日遺跡などが成立して、盆地内の開発が進んでいくものと考えていたが、今回の氏元遺跡の発見により、こういった単線的な解釈ではなく、さらに別の解釈を必要とする可能性も生じた。いずれにせよ、古浦砂丘遺跡をはじめとする周辺の集落遺跡の調査を待たねばならない。

こうして成立した初期集落は、南講武草田遺跡（弥生時代後期）でみられたように、度重なる洪水によって埋没するようなことをくり返しながらも、序々に耕地を広げていったものと考えられる。また、当時の集落では小規模ながらも玉作りなども行っていたことが、南講武大日遺跡、佐太前遺跡で明らかになっている。

向山古墳

このようにして序々に蓄えられていった余剰生産力は、古墳時代前期には総数50余基からなる奥才古墳群をはじめ、数多くの古墳を造りうるまでになったようである。古墳時代後期には、向山古墳をはじめ、岩屋古墳や多数の横穴墓にひきつがれてゆくようである。

今回の分布調査で親壺口縁部を発見した子持壺を有する向山古墳は、この口縁部の形態から山陰の須恵器編年II期に位置付けられ、割石積みの横穴式石室と伝えられていた古墳主体部も再検討の必要が生じ、子持壺自体も、松江市古曾志大谷1号墳、浜田市めんぐろ古墳^{四〇}とならんで当地方においては古式のものであることが判明した。この子持壺は、親壺に底がないこと、脚と壺の境が明瞭でないことなど、めんぐろ古墳例よりも後出的な要素をもつが、口縁部の形態、脚部に穿たれる透しが全て三角形であること、同じく脚部に描かれる文様が波状文のみで構成されることなど、子持壺としては系譜を異にするものである可能性がある。特に、対応する蓋のある形式の口縁部は、京都府城陽市の青山2号墳出土の台付壺に粗型が求められ、めんぐろ古墳出土例^{四一}のような口縁部とは明らかに系譜を異にするのである。この形式の子持壺は、松江市法吉町の岡田薬師古墳出土のものに類似があり、これは通常の杯蓋に躰状の土器を接合した形であり、今回採集した腰口縁は、こういったものの破片である可能性がある。このようにみてくると、島根半島部の向山古墳と岡田薬師古墳に若干の時期の差はありながらも、相似した形式の子持壺が供給されていることになる。

また、同時に採集した埴輪、甲冑の破片であることが考えられる鉄片など、今後この地域の古墳時代像を考える上で、避けて通うことのできない古墳といふまでになったものと考える。ただ、こうした遺物の採集地点が、さきにも触れたように隣接する雉ヶ崎荒神古墳^{四二}埴丘上であったことから、同古墳のものの混入が考えられることを改めて注意しておきたい。

この雉ヶ崎荒神古墳は、埴丘の大半が削平されており、円礫が多い量に散乱している。これは、この古墳の主体部の礫床の残骸と考えられ、周辺の古墳の知見によれば、礫床を有する古墳は主として古墳時代前半に築造されるので、ここでも、雉ヶ崎荒神古墳築造後に向山古墳の築造があったものと考えられる。おそらく、これらの古墳に先行して、この東方丘陵上にある径38mの堀部古墳^{四三}が築造されているものと考えられる。

講武岩屋古墳

向山古墳から直接はひきつづかないが、向山丘陵の西にある丘陵斜面に岩屋古墳が築造される。この古墳は、石棺式石室類似の横穴式石室をもつもので、今回の測量調査により、丘陵斜面を大きくカットした平坦面に石室を築き、埴丘を盛ったことがうかがえた。こうした古墳の立地は、松江市朝齋町廻原1号墳^{四四}でも認められ、岩屋古墳石室の縦長の平面形、比較的小形の石室などもあわせて考えると、この古墳は、古墳時代も終末に近い時間の築造が考えられる。測量時に採集した須恵器も、この年代観を補強するものといえよう。

条里制遺跡

こうした古墳時代の首長層が、律令制下の在地官人層に成長したと考えられ、名分塚田遺跡では、墨書き土器、須恵器転用鏡が出土している。この付近は、『出雲国風土記』では島根郡生馬郷に含まれる。

れ、あるいは郷序のような施設が存在した可能性がある。また、この遺跡と江戸時代の運河佐蛇川を挟んで位置する佐太前遺跡は、「風上記」の秋鹿郡神戸里に含まれるが、ここからは小形の円面鏡の出土をみている。

このような状況を背景に、この構造盆地に条里制が敷かれたものと考えられる。

以上みてきたように、今回の調査地周辺は、本町の原始・古代文化を考える上で、必要欠くべからざる地域なのである。

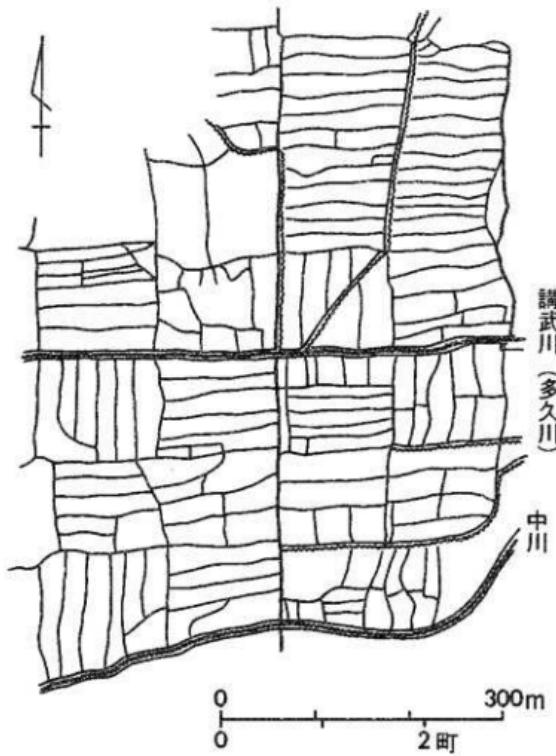


図58 講武地区条里制地割図（「講武村誌」より加筆転載）

- 注1. 中澤四郎「講武村條里の研究」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
2. 山本 清「佐太講武貝塚」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
3. 山本 清「佐太前遺跡」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
4. 「志谷奥遺跡」 鹿島町教育委員会 1976年
5. 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書1 名分塚田遺跡」 鹿島町教育委員会 1985年
『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書3 名分塚田遺跡2』 鹿島町教育委員会 1987年

6. 「講武地区遺跡分布調査報告書 1」 鹿島町教育委員会 1987年
7. 注 6 書
8. 「南講武小廻遺跡」(『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書 1』 鹿島町教育委員会 1986年)
9. 「奥才古墳群」 鹿島町教育委員会 1985年
10. 「菅田考古」16 島根大学考古学研究会 1983年
11. 「名分丸山古墳群測量調査報告書」 鹿島町教育委員会 1984年
12. 「菅田考古」15 島根大学考古学研究会 1979年
出雲考古学研究会「古代の出雲を考える 6—石棺式石室の研究—」 1987年
13. 山本 清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971年)
14. 注13書
15. 注 9 書
16. 注 5 書
17. 注 6 書
18. 注 6 書
19. 注 9 書
20. 「古曾志大谷 1号墳」 島根県教育委員会 1986年
21. 川原和人「浜田市めんぐろ古墳出土の須恵器について」(『島根考古学会誌』第2集 1985年)
22. 岸本雅敏「装飾付須恵器と首長墓」(『考古学研究』第22巻 1号 1975年)
23. 「岡田薬師古墳」 島根県教育委員会 1986年
24. 島根大学考古学研究会測量調査。
25. 出雲考古学研究会「古代の出雲を考える」6 1987年
26. 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 3 名分塚山遺跡 2」 鹿島町教育委員会 1987年
27. 1985~86年、鹿島町教育委員会発掘調査。

講武地区遭跡分布調査発掘基準点成果表

点名	緯度	経度	座標	標高
	m	m	m	m
1 - A	B = 35 31 20.8244 L = 133 1 38.7205	X = - 52.634.617 Y = + 78.057.938		H = 16.283
1 - B	B = 35 31 20.8852 L = 133 1 38.7481	X = - 52.632.736 Y = + 78.058.619		H = 16.300
2 - A	B = 35 31 19.7639 L = 133 1 36.1645	X = - 52.667.856 Y = + 77.993.835		H = 15.178
2 - B	B = 35 31 19.8288 L = 133 1 36.1679	X = - 52.665.857 Y = + 77.993.903		H = 15.179
3 - A	B = 35 31 15.6901 L = 133 1 36.4536	X = - 52.762.510 Y = + 78.001.943		H = 14.015
3 - B	B = 35 31 15.7546 L = 133 1 36.4627	X = - 52.760.522 Y = + 78.002.157		H = 13.995
4 - A	B = 35 31 15.5542 L = 133 1 38.7513	X = - 52.797.006 Y = + 78.060.133		H = 14.379
4 - B	B = 35 31 15.6189 L = 133 1 38.7442	X = - 52.795.016 Y = + 78.059.936		H = 14.412
5 - A	B = 35 31 13.3825 L = 133 1 36.0792	X = - 52.864.513 Y = + 77.993.402		H = 12.704
5 - B	B = 35 31 13.4473 L = 133 1 36.0848	X = - 52.862.517 Y = + 77.993.525		H = 12.681
6 - A	B = 35 31 12.2984 L = 133 1 39.7118	X = - 52.897.120 Y = + 78.085.206		H = 12.760
6 - B	B = 35 31 12.3632 L = 133 1 39.7164	X = - 52.895.122 Y = + 78.085.302		H = 12.755
7 - A	B = 35 31 11.1920 L = 133 1 36.3139	X = - 52.931.962 Y = + 77.999.904		H = 12.195
7 - B	B = 35 31 11.2566 L = 133 1 36.3211	X = - 52.929.969 Y = + 78.000.068		H = 12.213
8 - A	B = 35 31 9.4227 L = 133 1 36.9731	X = - 52.984.794 Y = + 78.016.972		H = 11.978
8 - B	B = 35 31 9.5375 L = 133 1 36.9784	X = - 52.982.797 Y = + 78.017.068		H = 11.960
9 - A	B = 35 31 8.1667 L = 133 1 36.6926	X = - 53.025.101 Y = + 78.010.257		H = 12.247
9 - B	B = 35 31 8.2312 L = 133 1 36.7007	X = - 53.023.109 Y = + 78.010.442		H = 12.230
10 - A	B = 35 31 8.0366 L = 133 1 38.7888	X = - 53.028.649 Y = + 78.063.098		H = 12.511
10 - B	B = 35 31 8.1008 L = 133 1 38.8002	X = - 53.026.667 Y = + 78.063.368		H = 12.526
11 - A	B = 35 31 4.5166 L = 133 1 34.6125	X = - 53.138.033 Y = + 77.968.834		H = 11.319
11 - B	B = 35 31 4.5812 L = 133 1 34.6196	X = - 53.136.039 Y = + 77.958.997		H = 11.304
12 - A	B = 35 31 5.0666 L = 133 1 37.8218	X = - 53.120.379 Y = + 78.039.537		H = 12.409
12 - B	B = 35 31 5.1315 L = 133 1 37.8250	X = - 53.118.380 Y = + 78.039.599		H = 12.467
13 - A	B = 35 31 1.4670 L = 133 1 34.3043	X = - 53.232.072 Y = + 77.951.889		H = 11.182
13 - B	B = 35 31 1.5316 L = 133 1 34.3115	X = - 53.230.079 Y = + 77.952.064		H = 11.196
14 - A	B = 35 31 1.7518 L = 133 1 41.4056	X = - 53.221.733 Y = + 78.130.713		H = 12.896
14 - B	B = 35 31 1.8166 L = 133 1 41.4099	X = - 53.219.735 Y = + 78.130.804		H = 12.917
15 - A	B = 35 30 57.8831 L = 133 1 35.0433	X = - 53.343.886 Y = + 77.971.484		H = 11.361
15 - B	B = 35 30 57.8976 L = 133 1 35.0522	X = - 53.341.897 Y = + 77.971.689		H = 11.497
16 - A	B = 35 30 58.3906 L = 133 1 39.2657	X = - 53.325.778 Y = + 78.077.709		H = 12.114
16 - B	B = 35 30 58.4549 L = 133 1 39.2762	X = - 53.323.793 Y = + 78.077.954		H = 12.146
17 - A	B = 35 30 55.6758 L = 133 1 33.4554	X = - 53.410.709 Y = + 77.932.059		H = 11.185
17 - B	B = 35 30 55.7395 L = 133 1 33.4706	X = - 53.408.743 Y = + 77.932.424		H = 11.199

点名	緯度 経度			座標		標高 m
18-A	B = 35 30 54.1635 L = 133 1 38.2174	X = - 53.456.201 Y = + 78.052.435	m	H = 11.739		
18-B	B = 35 30 54.2303 L = 133 1 38.2229	X = - 53.454.205 Y = + 78.052.356	m	H = 11.766		
19-A	B = 35 30 53.6968 L = 133 1 32.7050	X = - 53.471.856 Y = + 77.913.683	m	H = 10.386		
19-B	B = 35 30 53.7609 L = 133 1 32.7175	X = - 53.469.878 Y = + 77.913.981	m	H = 10.401		
20-A	B = 35 30 54.8036 L = 133 1 39.0664	X = - 53.436.351 Y = + 78.073.728	m	H = 12.069		
20-B	B = 35 30 54.8685 L = 133 1 39.0719	X = - 53.434.352 Y = + 78.073.772	m	H = 12.072		
21-A	B = 35 31 3.8094 L = 133 1 24.6517	X = - 53.162.007 Y = + 77.708.089	m	H = 9.453		
21-B	B = 35 31 3.8741 L = 133 1 24.6586	X = - 53.166.013 Y = + 77.708.244	m	H = 9.487		
22-A	B = 35 31 4.2450 L = 133 1 29.1346	X = - 53.147.604 Y = + 77.820.906	m	H = 10.056		
22-B	B = 35 31 4.3096 L = 133 1 29.1411	X = - 53.145.610 Y = + 77.821.051	m	H = 10.055		
23-A	B = 35 31 0.0824 L = 133 1 24.5831	X = - 53.276.868 Y = + 77.707.358	m	H = 9.148		
23-B	B = 35 31 0.1473 L = 133 1 24.5844	X = - 53.274.868 Y = + 77.707.373	m	H = 9.123		
24-A	B = 35 31 1.9556 L = 133 1 29.6137	X = - 53.218.043 Y = + 77.833.641	m	H = 9.930		
24-B	B = 35 31 2.0205 L = 133 1 29.6186	X = - 53.216.044 Y = + 77.833.695	m	H = 9.960		
25-A	B = 35 39 56.7125 L = 133 1 27.4684	X = - 53.380.078 Y = + 77.780.948	m	H = 10.286		
25-B	B = 35 39 56.7771 L = 133 1 27.4754	X = - 53.378.084 Y = + 77.781.108	m	H = 10.297		
26-A	B = 35 39 58.4891 L = 133 1 30.7017	X = - 53.324.625 Y = + 77.861.929	m	H = 10.378		
26-B	B = 35 39 58.5539 L = 133 1 30.7033	X = - 53.322.625 Y = + 77.861.952	m	H = 10.362		
27-A	B = 35 39 58.8030 L = 133 1 24.1827	X = - 53.378.009 Y = + 77.698.147	m	H = 9.806		
27-B	B = 35 39 58.8678 L = 133 1 24.1856	X = - 53.376.010 Y = + 77.698.202	m	H = 9.818		
28-A	B = 35 39 53.7993 L = 133 1 31.6135	X = - 53.468.936 Y = + 77.886.157	m	H = 10.078		
28-B	B = 35 39 53.8640 L = 133 1 31.6192	X = - 53.466.940 Y = + 77.886.284	m	H = 10.094		
29-A	B = 35 39 49.2804 L = 133 1 25.7070	X = - 53.609.478 Y = + 77.738.564	m	H = 9.332		
29-B	B = 35 39 49.3452 L = 133 1 25.7093	X = - 53.607.478 Y = + 77.738.605	m	H = 9.321		
30-A	B = 35 39 52.7719 L = 133 1 18.1385	X = - 53.503.544 Y = + 77.546.954	m	H = 8.744		
30-B	B = 35 39 52.8366 L = 133 1 18.1455	X = - 53.501.550 Y = + 77.547.111	m	H = 8.759		
31	B = 35 31 17.3153 L = 133 1 39.6203	X = - 52.742.548 Y = + 78.081.551	m	H = 29.123		
32	B = 35 31 16.5723 L = 133 1 39.4869	X = - 52.765.475 Y = + 78.078.390	m	H = 27.243		
33	B = 35 31 19.0041 L = 133 1 41.8121	X = - 52.690.027 Y = + 78.136.310	m	H = 41.641		
34	B = 35 31 19.3968 L = 133 1 42.4543	X = - 52.677.784 Y = + 78.152.381	m	H = 44.487		
35	B = 35 31 22.7182 L = 133 1 34.5152	X = - 52.577.186 Y = + 77.951.494	m	H = 27.886		
36	B = 35 31 21.9568 L = 133 1 34.0294	X = - 52.606.752 Y = + 77.939.462	m	H = 34.925		
37	B = 35 31 22.2162 L = 133 1 34.3760	X = - 52.592.683 Y = + 77.948.121	m	H = 29.536		

*点名の数字は測量区を示す。Aは調査区南西、Bは北東の杭を示す。

31~34は向山古墳、35~37は片尾古墳測量用の杭である。

図 版

図版 1



調査地周辺航空写真



講武盆地遠景(北から)

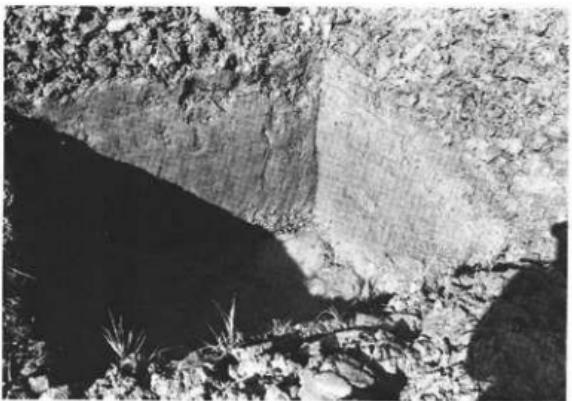
図版 2



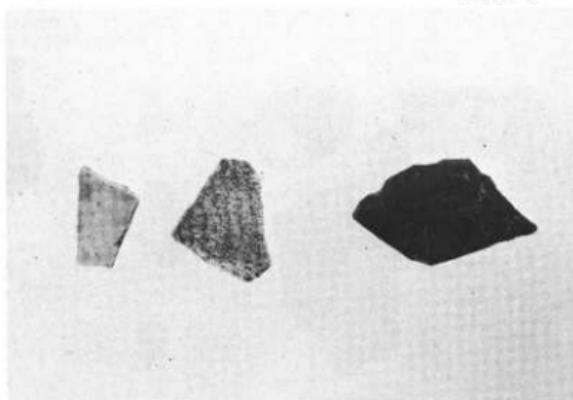
第1調査区



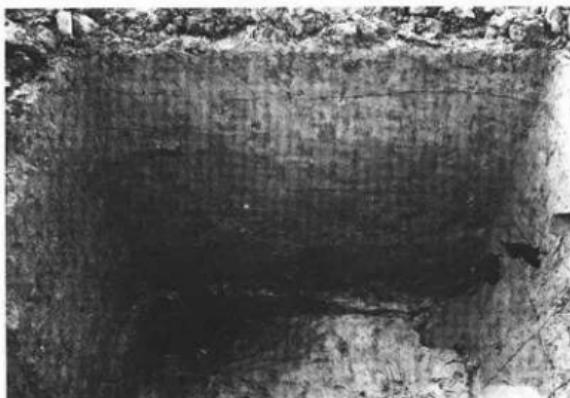
第2調査区



第3調査区



第1・3調査区出土遺物



第4調査区



第4調査区
遺物出土状態

図版 4



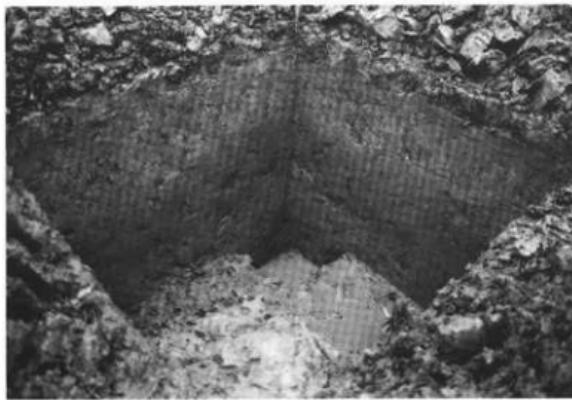
第4調査区出土土器



第4調査区出土石器、黒曜石



第4-1調査区



第4-2調査区



第4-3調査区

図版 6



第4-4調査区



第5調査区



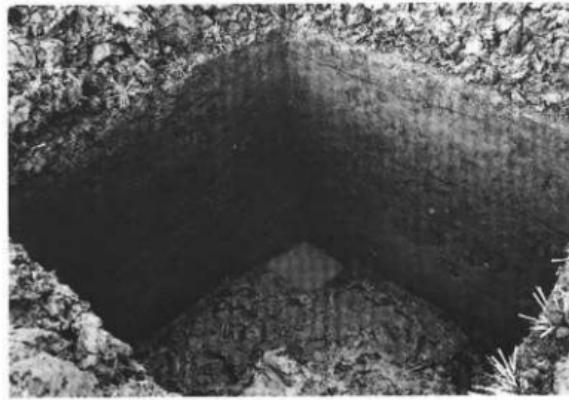
第6調査区



第7調査区



第8調査区

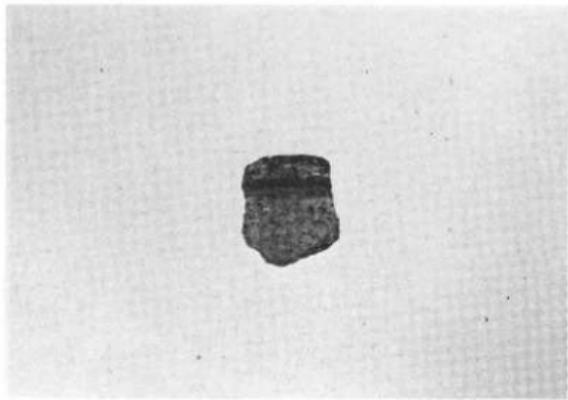


第9調査区

図版 8



第10調査区



第10調査区出土土器



第11調査区



図版 10



第14調査区落込み



第15調査区



第16調査区



図版 12



第20調査区



第21調査区



第21調査区土層



第22調査区

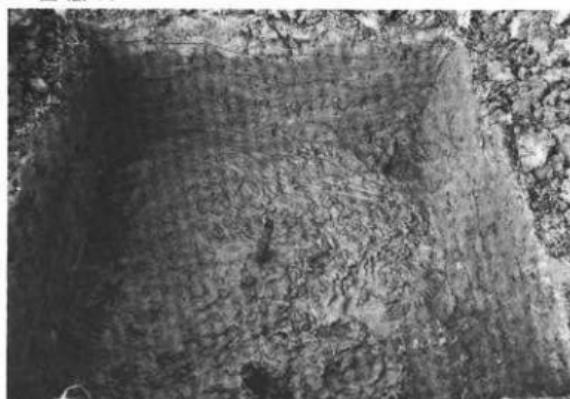


第23調査区



第24調査区

図版 14



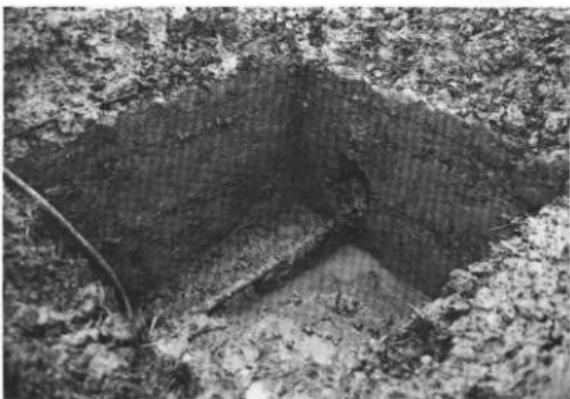
第24調査区杭出土状態



第25調査区



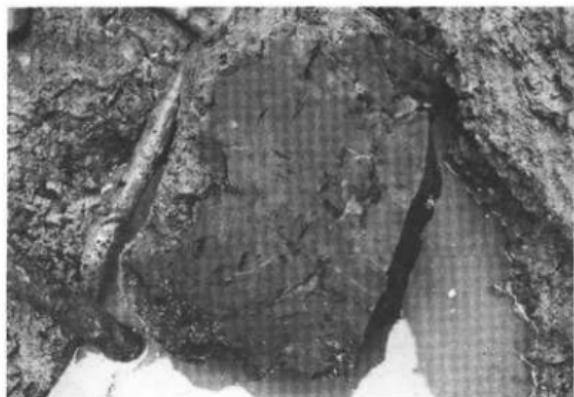
第26調査区



図版 16



第29調査区
流木切断作業



第29調査区
流木年輪



第30調査区



調査風景
(第10調査区)



調査指導風景

圖版 18



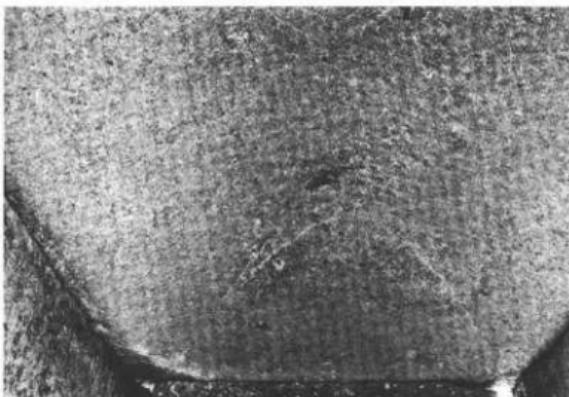
講武岩屋古墳



講武岩屋古墳背面



狭道・玄門部

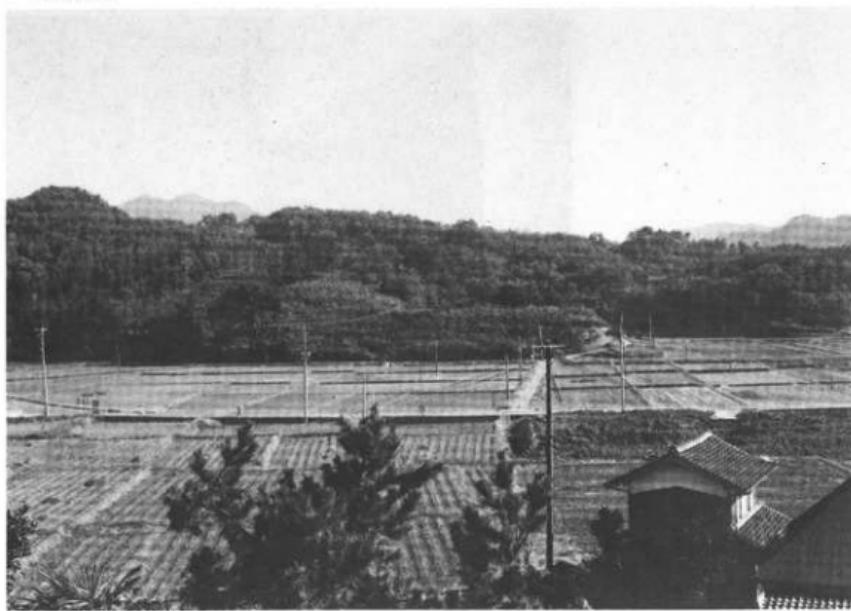


玄室 内

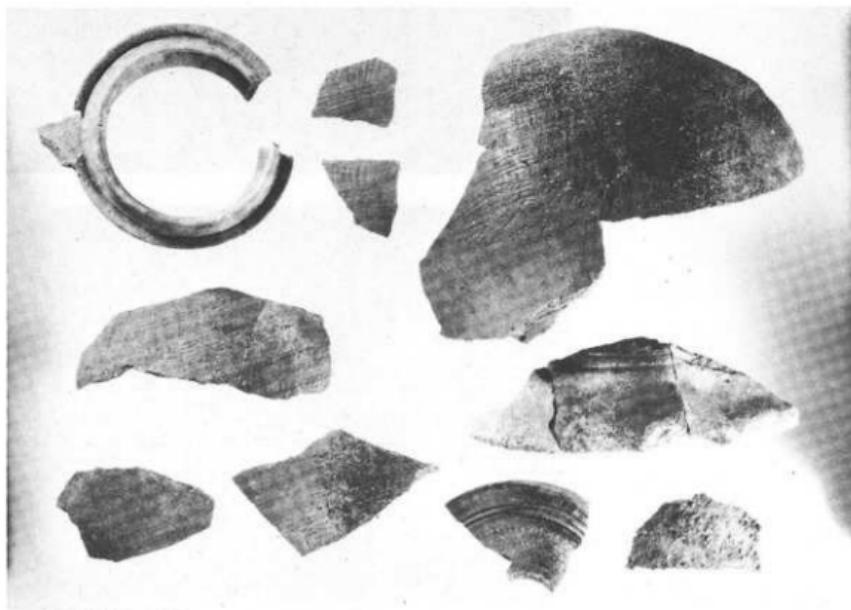


測量調査風景

図版 20



向山丘陵



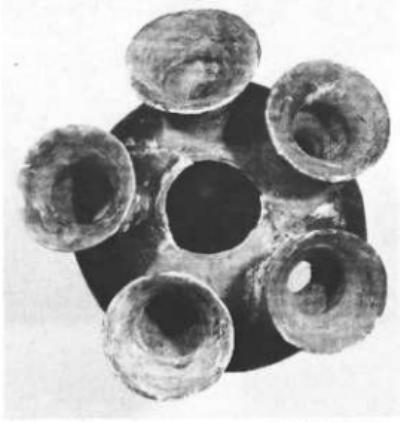
探集須恵器、鉄片



向山古墳
須恵器子持壺

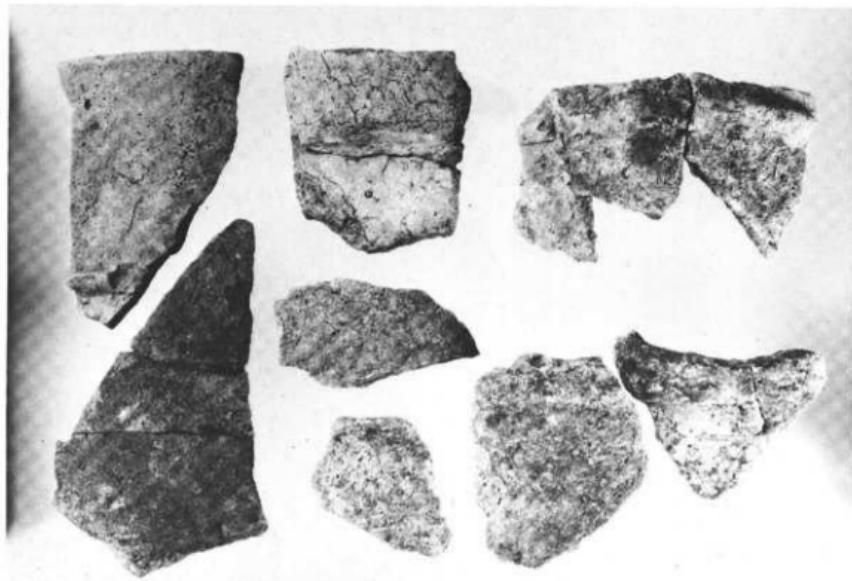


同上親壺口縁



子持壺上面觀

図版 22



探集 塙輪



向山石室石材



蛭ヶ崎荒神古墳
円礫散乱状態



蛭ヶ崎荒神古墳
遺物採集状態

講武地区遺跡分布調査報告書 2

1988年 3月

発行 鹿島町教育委員会
鳥取県八東郡鹿島町大字佐陀本郷640-1
印刷 (有)黒潮社
松江市向島町182-3